
東方酒乱伝

マウンテンデュー（クロウバイツ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方酒乱伝

【Nコード】

N46510

【作者名】

マウンテンデュー（クロウバイツ）

【あらすじ】

一つの歯車は働き、そして壊れた。しかしそれは始まりだった。その歯車は神と出会い、力を貰う。しかしそれは戦うための力ではなかった。「あらゆる酒を作り出す程度の能力」、それが彼が貰った力の名。別に不満もない彼は屋台を引っ張りながら各地を回る。悩みがあればそれを聞く。そんな元人間が妖怪になった奇妙なお話。

主人公設定

名前 酒代 縁さかしろ えにし

能力「あらゆる酒を作り出す程度の能力」「空間を創り出す程度の能力」

「空間（ry）」は好みの広さ、好みの環境などを創り出せる。しかし、もっぱら食料庫や酒蔵にしか使っていない。生き物や植物を飼う事も可。好きなところから入れるが、入ったところからしか出れない。

「あらゆる酒（ry）」はその名のとおり、あらゆる種類の酒を作り出せる。ここで注意してほしいのは「作り出す」のであって「創り出す」のではない。

普段は屋台を引っ張りながら各地を回っている。たまに人助け。たまに修羅場に陥る。

前世は人間であったが転生時に妖怪に変わっていた。ちなみに種族は酒妖怪？

妖怪のため年数を重ねるごとに妖力が増している、のだが、空間を保つために能力を常時発動しているため、そちらのほうに妖力を使われている。本人無自覚。さらにどんどん空間を増やす為、本来相応な妖力があるにも関わらずその妖力が使えない。

何に対しても自分のペースを崩さずに相手に接する。

料理の腕はかなりのもの。というか何百年も料理してればそりゃ上

手くなる。おつまみに関しては他の追随を許さないほどである。
酒に関しては底なし。

特技、得意なもの・・・というより趣味は人の悩みや愚痴を聞いて
それを解決すること。

煙草を良く吸っているがどこから出しているのかは不明。

唯の人間からは美味しい酒を出す酒屋としての認識。

プロローグ（前書き）

ネギまの小説の息抜きとして書かせてもらいました。他の小説と平
行して更新していくのでこの小説の更新速度は期待しないで貰いた
いです。それでもお好きな人はどうぞ、ご覧ください。

プロローグ

ある一人の男がいた。

その男は普通の人間で、その身を社会の歯車の一部として機能させながら生きてきた。

そしてその男は気づいた。

「俺の代わりなんていくらでもいるんじゃないのか？」と

歯車は壊れれば交換される。よりよい働きをもつ歯車に。壊れた歯車は破棄される。もう働けない歯車が。

それはこの社会の縮図だとその男は思った。

社会に必要な人間は社会に拒絶される。無能な人間は社会に捨てられる。

社会に必要な人間は社会から歓迎される。有能な人間は社会に拾われる。

「だったら自分はどの部類に入るのだろうか？」

その男は会社でも平凡。成功することもあれば失敗することもある。

妻は居ないが彼女はいる。給料だってそこそこもらっている。

「俺は一体何なんだろう？」

それに気づいた男は毎日それを考えながら社会の歯車として働いていた。

毎日、毎日。仕事をしているときも、通勤時にも、食事時にも。

そしてその歯車は唐突に壊れた。

なんてことはない、唯の人身事故。トラックのブレーキが間に合わなかったらしく、トラックは歯車に突っ込んだ。そして歯車は壊れた。

葬式するとき、家族は泣いた。歯車の彼女も泣いた。会社の同僚も泣いた。その男に関わる者すべて泣いた。

それは男が有能だったからだ。

しかしそれは社会についての話ではない。

その男は話を聞くのがうまかった。

親の離婚の危機のとき、母親から、父親から話を聞いて離婚を止めさせたときもある。会社の同僚に悩みを聞かされればそれを受け止め、優しく諭した。

その男に話したおかげで救われたものがあるのだ。

しかし男は死んでしまった。壊れてしまった。

それがその男の終わりであり、始まりであった。

一杯目・知らない物は食べては駄目！（前書き）

あゝなんかスラスラと書けますね・・・。気分転換に書いてみたけどなかなかいいかもしれないです。

一杯目・知らない物は食べては駄目！

静かな森の中、その中の一角で陽炎のように揺らめく場所があった。

揺らめきは徐々に景色を歪ませ、そしてその歪みが頂点に達しようとしたその瞬間、一人の男と屋台が現れた。

やわらかい音を立てて地面に着地した男はあたりを見回した。

「………森？」

どこを見ても木、木、そして木。足元には雑草が生えており、小鳥の囀りも聞こえる。

「どこから見ても森です本当に」ry

とそんなネタを挟める位には頭は冷えている男。とにかく一緒に現れた屋台を見てみると一通の手紙が屋台の机の上に置いてあった。

「手紙……？」

それを拾い上げてみると、それは自分を転生させた神からの手紙だった。真っ白な封を開けて中を覗く。

「何々…….?」

書いてあったのは転生時の男の詳細についてだった。さらに深く読み進めていくと気になる単語が見つかった。

『私はお前を過去の東方の世界に送った。』

「東方…….?」

男はその単語に聞き覚えがあった。昔、まだ男が死ぬ前の世界で同僚の一人がそんな話をしていたような気がする。それで気になって調べてみると妖怪やおよそ人間ではない者たちがいる世界だった。

「かなあ…….?」

自分の中の記憶を洗いざらい浚っていてもあいまいな事しかわからない。しらべたのがずいぶん昔のことなのだ。最近だって同僚の話の小耳に挟むぐらいにしかやってない。

取り合えず考察は後回しにして手紙を読み進める。そこには彼が妖怪になったということも記されていた。

『あ、後ミスっちゃってお前を妖怪にしちゃった メンゴ』

この手紙の主が綺麗な女性だったらかなりあっている文面なのだが、いかんせん彼があつた神はよぼよぼの爺。キモイとしか言いようのない感情が芽生える。

しかし、別に自分を妖怪にしたことについて怒っているわけではない。妖怪になったとはいえ、二度目の生を受けさせてもらったのだ。文句を言うどころか逆にお礼を言いたいぐらいだ。

「（有難う、って言っとけばいいかな？）」

心の中でそう呟くと能力についてのことが記されている場所にたどり着いた。

『お前の能力は「あらゆる酒を作り出す程度の能力」と「空間を創り出す程度の能力」にしておいた。感謝しろ！』

たしかこの世界は妖怪などがいて、危険もある気がする。こんな能

力で生き延びれるのか心配になった。

『前者の能力はその名の通りあらゆる酒を作り出せる。しかしあくまで「作り出せる」のであって「創り出せる」わけではないから注意しろ。』

簡単に言うとも何もないところから酒は創り出せない。しかし、材料などがあれば作り出せる、というわけだ。

『後者の能力は貯蔵庫や酒蔵にするために与えた。よって創り出した空間には好きなところから入れるが入ったところからしか出られない。あ、あと植物とか動物も飼えるからやってみれば？』

なんとも適当ない草だが、まあ能力を与えてもらったことに関してはありがたい。自分は酒は好きな部類に入るのだ。週に何回かは飲みに行く程度には。

『名前は自分で決める。べ、別に面倒だったからじゃないか』

あまりにも気持ち悪すぎてついその部分だけを破いてしまった彼に責任はないと思う。にしても名前か……。と名前について考える。

名前は別に前世の名前を使っても支障はない。しかしこの身は既に前世のものではない。妖怪だし。だから新しい名前をつけることにした男。

とにかく自分の名前にあったような漢字などを地面に書き出していく。

「……………これは無い。」

思い浮かんでくるのは、夜や漆黑、挙句の果てには紅蓮などという厨二病真つ盛りな漢字ばかりであった。未だ厨二病から抜け出せてない自分に嫌気が差し、書き出した漢字を足で消した。

せめて厨二病っぽくない名前を付けようと頭を捻らせる。

名前……名前……刹那？いや厨二だな……能力は酒……空間……酒？酒で考えるか……酒……酒……

と考えていると不意に頭にひらめいたものがあつた。そしてその名前を呟いた。

「酒代縁……………」
さかしろえにし

これはいいんじゃないかと自分を褒めてやりたい気持ちになる男。そして男はその名前を自分に付けた。

「今から俺の名前は酒代縁だな。」

うんうんと一人頷くと必要の無くなった手紙は自動的に燃えた。その時手を離すのが遅れてしまい、手に火傷を負ってしまった。ひりひりとした痛みが手に伝わるが、妖怪化したせいか、すぐに治ってしまった。

「もう人間じゃないからな……。」

人間への未練も少しあったが、なってしまったものは仕方が無い。気を取り直して改めて屋台を見る。基本的に綺麗な作りになっており、客席は5人座れる程度。料理場には何故かコンロや水道が通っていた。

屋台を引っ張ってみると意外に軽い。屋台が軽いのかな？と考えるが自分が妖怪になったから力が上がったのだと理解する。そのままガラゴロと屋台を引っ張っていく。

兎にも角にもとりあえずは食料探した。食料が無ければ酒も作れないし、食べる事だっでできない。

とりあえず縁はそこら辺に生えてあった赤い色の木の実をとって口に含む。味としては悪くない。前世でたとえるならみかんみたいな味だ。少し採っていいこうと思った縁は次々と木の実を採る。

「空間を創り出す・・・だっけ？」

十分に木の実を採った縁は収納場所を確保するため、能力の一つである空間を創り出そうとしていた。

しかしなかなか創り出せないのか悪戦苦闘する縁。不意にその場に裂け目ができるところをイメージするとすんなりいった。中を見てみるとそこは真っ暗な闇。気味が悪いと思いつつその空間に木の実を入れていく。全部入ったところで空間を閉じた。

「ん、これは何だ？」

足元を見てみると食べられそうな実が雑草に混じって揺れていた。好奇心に負けた縁はその実を摘んで口の中に放り投げた。

「うん・・・味は悪く・・・ッ！」

味わっている最中に縁に異変が起こった。脂汗がだらだらと流れ落ち、ガクガクと膝が震える。これはヤバいと解決方法を探し、そして草むらに飛び込んだ。

……つまりは衝撃的な腹痛に見舞われたのだ。その摘んだ実の毒によって。

縁が草むらから出てきたのはかなり時間がたってからだった。やつれた顔をしながら縁は屋台を引っ張っていった。

二杯目・初めてのお酒（前書き）

何か酒の説明みたいな回に・・・
細かいところは気にしない方向で

二杯目・初めてのお酒

この世界に生まれてから早一週間。とりあえず食料の確保をした縁は早速酒造りに取り掛かることにしたのだが……。

「設備が無いじゃん……。」

そう、いくら酒を創り出せるとは言っても『創り出せる』訳ではないので相応の設備が必要になってくる。早い話、設備が無ければ酒は作れないのだ。そのことに思いつきり頭を抱える縁だったが、あることを思いついた。

「だったら空間を創るついでに創ればよくない？」

酒の場合は『作る』だが、空間の場合は『創る』という風に定義されている。だから空間を作るついでに酒の設備について創りだせばいいのではないかと考えたのだ。物は試しと早速新しい空間を創り出す。その時に設備のことについても忘れない。

できた空間に入り込むとそこは縁の想像通りの場所になっていた。昔の日本に合わせたのだろう、その設備も機械などではなくすべて木によって作られていた。

精米機、甑こしと呼ばれる大きな蒸し釜、麴造りをするための室むろ、酒を入れるための貯蔵タンクなどもろもろの設備がそこに置いてあった。よしっ！とガッツポーズをすると早速酒を作るために最初に採った赤い果実を入れた空間を開けると・・・

「うぶ・・・何だこの臭い!？」

開いた瞬間縁の鼻腔を腐乱臭が通り抜ける。その臭いに胃の中の物をすべてぶちまけてしまいそうになったが堪えて中を覗くと、そこには赤い果実がすべて変色して腐っていた。

「腐ってやがる・・・。」

空間は空間でも物は腐るし、時間も経つ。この能力も万能ではないことをしつた縁だった。

とりあえず腐った果実はすべて捨て、まずは日本酒を作ることに決めた縁。どこかの村からパクって来た米を精米機にかける。作り方は能力のおかげか、すらすら頭に入ってくる。精米が終わると米洗いをするために水に漬ける。こめ荒いとは精米した米の表面に付着している糠などを水で洗い落とすためにする肯定だ。さらに水分を含ませるために水に浸けておく為でもある。ここで、蒸米が麴づくりに適した保有水分を得るように調節するのだ。吟醸酒をつくるた

めには秒単位なのだが別に今回大吟醸を作るつもりは無いので適度な水分量にしておく。

米に水分がついたら今度は大きな蒸し器の釜に入れる。これは米蒸しと言われる工程で、およそ一時間ほど蒸す。それが蒸しあがると近くに置いてあった風呂敷を広げて米を天然の冷気で冷ます。

今度は麹造りに入る。室といわれる部屋にて蒸米を35度ぐらいまで冷やし、そこに種麹を混ぜ、麹菌を繁殖させる。繁殖をつづける麹菌の発熱によって麹の温度が変化してゆくので、差し込んだ温度計で監視しながら少しでも温度が上昇したら換気をし、逆に下降したら熱風を送り込む。この麹造りに要する時間は二昼夜、48時間。その間、寝ずの番がつづく。縁も二日寝ずに続けたのだが、結構きつかったらしく、ちょっとフラフラになっていた。

そしてそのできた麹と蒸米、そして外の川から持ってきた水、酵母菌を入れてできたのが酒母というもので、酒の元になることから「もと」と言われている。この際酵母の働きを阻害する雑菌類から守るため、乳酸をいれる必要がある。入れて15日後にもとが作られるため、その間、縁はいろんな食料を採っていた。ほとんど民家などからかっぱらってきた物ばかりだったが。その分多くの食料が集まった。

もとが作られると仕込み、搾り、火入れなどが行われるのだが、長くなるので割愛。

そうした苦労の下にできた縁特製日本酒第一号。記念に何本か瓶の中に詰め、一杯飲んでみた。

「・・・うん、うまい。」

文句の無い味だった。最初にしては上々というべきであろう。半分以上ぐらいを瓶の中に詰め、外の屋台に詰め込む。後は貯蔵庫に入れて久しぶりに空間の外に出た。

「あゝ日差しが暖かい・・・。」

一仕事終えた後の心地よい疲労感というべきか、太陽が放つぽかぽか陽気に身を任せてひと時の睡眠を楽しんだ。

「…………お…………い…………おい…………」

心地よい睡眠の中誰かが縁のことを呼んでいるのだろう、縁を呼ぶ声が聞こえる。

「…………ん…………」

縁は眉を潜めながらもぞもぞと身を擦るとゆっくりと起きた。

「くああああ……………つと誰？」

目を擦りながら自分呼んだ主を見るとそこにはいかにも妖怪です！といわんばかりの妖怪がいた。容姿としてはもろ蜘蛛で、目は顔に幾つも付いていた。

妖怪・土蜘蛛。と呼ばれる妖怪なのだが…………。

「……………え？」

急に目の前に蜘蛛が現れ、あまつさえそれが土蜘蛛という妖怪だっ

た事に衝撃を受けたのか、その場に固まってしまった。そのことに気づかずにぺらぺらと前の土蜘蛛は喋る。

「お前こんな所で寝てたら危ねえぞ？」

いや、現在進行形で危険な目にあってますと言いたかったが、言う前に気づいた。今自分は妖怪になっているから、食われないのだとそう気づくと何故か目の前の土蜘蛛に対して親近感が湧いてきた。

「あ、そうなのか。悪い、助かった。」

礼を言いながら立ち上がり、服に付いた埃を払う。縁の礼にいいつてことよと笑って返す土蜘蛛にちよつとかっこいいなと思った縁だった。

「でもなんでこんな所で寝てたんだ？」

「ああ・・・ちよつと酒作ってたんだけどな、疲れて寝ちまったんだよ。」

ふああと欠伸をする縁を見ながら土蜘蛛は目を丸くしていた。

「酒？」

聞き返した土蜘蛛に、は？と目を向ける縁。土蜘蛛はだからいいながらと続ける。

「酒ってなんだ？新しい妖怪か？」

もしかしてと縁は戦慄する。まだこの時代は酒も伝わってない時代なのか？と思いながらも酒の説明を始める。

「あゝ、酒って言うのはな、アルコールが入っている飲み物だ。」

「アルコール？」

そっから説明しなきゃいけないのかよ！どんだけ昔の時代に送ったんだ神様！と心中で頭を掻きまわったがそれを表情に出さずにさらに説明する。

「アルコールって言うのは……簡単に言えばそれを飲めばいい気持ちになれるものだ。」

現代で言えば補導されかねない怪しすぎる言い方だが、土蜘蛛は意

外にも納得してくれたようだ。

「へえ、じゃあ俺にそれを飲ませてくれよ。」

「ああ、さっき出来上がったばかりだからな。いいぜ。」

よっしゃあ！と歓声を上げる土蜘蛛を微笑ましく見ながら縁は屋台に積んだ酒瓶の一つを取り出し、器に注ぐと土蜘蛛に差し出した。

「ほら、これが酒だ。飲んでみな。」

「おお……これが酒ってやつか……じゃあ飲ませてもらうぜ。」

器用に器を爪の一つに乗せるとごくりと喉を鳴らした。酒という未知の飲み物に緊張しているのか、徐々に器を口に運び、そして酒を飲み干した。飲み干した後無言で土蜘蛛はその場に固まる。まさか不味かったのか？と思ったがそれは杞憂に終わった。

「ああ……うめえ……。」

恍惚とした表情でそう呟いた土蜘蛛を見て、縁は隠れながらガッツ

ポーズをした。空になった器にさらに酒を注ぐと土蜘蛛は一気に酒を飲み干した。

「この酒ってやつ、めっちゃくちゃうめえな！」

「だろ？まあこれが最初に作ったやつだからまあまあの出来だけだなー。」

「これがまあまあ？！この旨さでなんてこといいやがる、旨すぎるだろこれは！」

その気迫に押されたのかすこしタジタジになる縁。縁から酒を引っ手繰ってついでは飲んでついでは飲んでを繰り返す土蜘蛛。とこいで土蜘蛛が酔ったのか、すこしフラツとしたのが見えた。

「ああん？何だ？少しフラフラするんだが……。」

「酒一杯で酔うのかよ……体制無さ過ぎだろ……。」

そう呟きながら土蜘蛛から空になった器と瓶を取り、屋台にしまつ。土蜘蛛は酒を取られたことに憤慨して縁に詰め寄った。

「おい、もつと酒を寄越せ！」

「馬鹿、酒の飲み過ぎは体に毒だぞ。今日はこれで終わりだ。」

酔った土蜘蛛を宥めながら酒の飲みすぎによる危険性を説いた。酔った頭でもその危険性を理解したのか、渋々ながらも引いてくれた土蜘蛛を見てコクリと頷く。

「今日で終わりってえ事はあまた明日あ飲ませてくれるのかあ？」

酔いが完全に回ったのか、呂律があまり回らなくなってきた土蜘蛛に苦笑を漏らす縁。

「まあ明日って事はあるかもしれないけど、俺はいろんなところを回るからなあ・・・明日じゃなくてまた会った時だな。」

そっか・・・と呟いた土蜘蛛は眠気が襲ってきたのか、コテンと倒れて寝てしまった。縁は土蜘蛛を見えないように草むらの中に運ぶと上から木の葉を掛けてカモフラージュ兼布団代わりにしてその場を去った。

「次はどんな妖怪に会えるかなあ・・・。」

そんなことを呟きながら縁はガラゴロと屋台を引つ張っていった。

次の日、酒を飲んで寝てしまった土蜘蛛は目を覚ました。木の葉が布団代わりに掛けられていたところを見ると世話を掛けさせてしまった事を少し後悔した。

帰ってこない土蜘蛛を心配したのか、何体かの妖怪が探しに来ていたのだ。その妖怪が土蜘蛛を見つけると何があつたのか聞くと土蜘蛛は酒という飲み物のことを話した。そのことに興味を持った妖怪達はその不思議な飲み物の酒を作り出す縁のことを探すこととなる。そしてそれを不思議に思った別の妖怪がその理由を聞き、またその妖怪は縁に興味を持つ。

縁の知らないところで酒とそれを作り出す不思議な妖怪のことが広

まっっていくのであった。

三杯目・おつまみ(前書き)

独自解釈、独自設定が入っています。つっこみは無しで

三杯目・おつまみ

「ありがとーございましたー」

縁の陽気な声がある森で響いた。縁は先程まで屋台で酒を飲んでいたら妖怪達の背中を見送るとーっ溜息を吐いた。その溜息の理由は先程の妖怪達の一言が胸に残っているからだ。

『なんか、口が寂しいな。』

確かに彼の元いた世界だと酒と一緒におつまみも出てくる。しかし、今の今まで縁はおつまみを作れなかった。

料理の腕に関しては問題ない、しかし材料が無いのだ。ビーフジャキーや枝豆、焼き鳥などがおつまみとして上げられるが、材料が無い。

正確な年代はわからないがどうも神様はかなり前の時代に縁を送ったようで、今まで歩いてきても村らしい村は見つけられなかった。

そんな時代に牛や鶏がいるはずも無い。空を飛んでいる鳥ならいくらでもいるのだが、生憎と戦闘能力の無い縁ではその鳥を捕まえることが出来ない。

土蜘蛛に酒を飲ませてから何故か酒を飲みたい！という妖怪が増え、酒だけが屋台を開いた縁にとってはおつまみが無いのは死活問題だ。

縁としてはお客の要望には出来るだけ答えたい。如何したものかと考えているうちに一人の妖怪が訪ねてきた。とりあえずその考えを頭の隅に追いやり、その妖怪に酒を差し出す。

ちびちび飲んでいる妖怪が酔ったのか、愚痴を言い始める。

「俺の嫁がよお・・・俺が浮気したとかっていってさ・・・喧嘩して来たところなんだよお・・・」

ウワァァァン！と泣き出してしまったこの妖怪はどうやら泣き上戸らしく、机に突っ伏して酒を飲む。

縁はもう慣れたといわんばかりに杯を拭きながらその泣き上戸の妖怪を宥める。

落ち着いたのか、妖怪は泣き止み、酒瓶を縁に返すと照れくさそうに頭を掻いた。

「すまねえな、俺の愚痴に付き合ってもらっちゃまって。」

「気にしないでください、それが私の仕事ですから。」

「でもそれじゃあ俺の気が収まらねえし・・・そうだ!」

思い出したように懐を探る妖怪。懐から手を抜くとそこには小さな小袋が握られていた。それを縁にグイッと押し付ける。

「これは俺の家の近くで採れたヤツでな、食うと旨いんだ。少ししかねえけど貰ってくれ。」

その小袋を縁に押し付けると縁の言葉を待たずに空を飛んでどこかに行ってしまうた。呆然としている縁はハッと気を取り直すとその小袋の中を覗く。そこには緑色の楕円状の実があった。

「これは・・・!」

縁にはその実に見覚えがあった。その実の名前は・・・枝豆。その小袋の中には枝豆が十数粒入っていた。

何故こんな時代に枝豆があるのかは分からないが、とにかくこれはすぐさま栽培する必要がある。でもどこで？と考えた縁に神様の言葉が思い浮かぶ。

『植物とか動物飼えるからやってみれば？』

確かあの神様の手紙には植物などが創り出した空間で育てられると書いていた筈だ。出来る、と思った縁はとりあえず植物を育てるのに適した畑を頭に思い浮かべ、空間を創り出した。

出来た裂け目に入るとそこは立派な畑が広がっていた。土を触ってみると柔らかいし、少し掘ってみるとミミズが出てきた。まさにここは理想的な畑だろう。

早速縁は枝豆の幾つかを畑に空けた小さな穴に埋め込み、水を掛けた。2、3ヶ月も経てば立派な枝豆が出来るはずだ。一応何粒かの枝豆を残しておいて後は全部畑に植えた。

「実がなつたときが楽しみだなあ・・・。」

そんな淡い期待を胸に抱き、縁は枝豆の栽培を始めた。

「おお、立派になったなあ。」

そんなことを呟いている縁の目の前には枝豆が立派に育っていた。いや、これは枝豆というのだろうか？縁が植えたのは確かに枝豆だったのだが、何かおかしい。

「どうしてこう枝豆が木になるんだ？」

そう、縁の目の前には枝豆の木があった。別に珍しい育て方をした訳じゃないのに何故こんな立派過ぎる枝豆になってしまったのだろうか？

とりあえず食べてみようと思えば枝豆の木に生っている実を摘む。見てみるとそれは枝豆そのもので、何故これが木になったのか、未だに分からない。

さやから実を取り出してみても普通の枝豆。口に含んでみても普通

の枝豆。うーんと唸ってみても普通の枝豆。その内、縁は考えることを止めた。

枝豆がいつぱい出来たからいいんじゃない？という思考に落ち着いた縁は何本か出来た木から枝豆を全て摘むと食料貯蔵庫に入れた。

幾つか枝豆を取り出すと鍋を火にかけて沸騰した水を鍋に張る。その中に枝豆をさやごと入れてグツグツ煮る。よく煮えたら熱湯から枝豆をあげて水を切り、塩を振り掛ける。いわゆる塩茹でというやつだ。

用意した酒と一緒に飲んでみると酒のうまみと枝豆の旨みが良く合う。何杯も酒を飲み干してしまい、流石に酔ったか？と思ったがぜんぜん酔わない。妖怪だからか？と思ったが別に気にすることも無いのでそのまま酒を飲み干した。

「っかあ〜！この枝豆ってヤツ、酒と一緒に飲むとまた格別だなあ

「！」

「ああ、俺がやった豆がこんなに酒に合うなんて思わなかったぜ！」

ワイワイ騒ぐ妖怪達を見て微笑んだ縁。皆が喜んでくれる所を見ると、自分も幸せな気分になる。今は屋台で飲み会、というよりかほもはや宴会みたいになっている。

至る所で枝豆を食べながら酒を飲み、また枝豆を食べ・・・といった風にエンドレスが形成されている。酒はタンクに出来たら入れているのでまだまだ量があるはずだ。

「この宴会が終わったら真剣に酒でも作ろうかね・・・？」

酒を取り出しては妖怪達に渡すことを繰り返している縁はそんなことをポツリと呟いた。今まで作ってきたのは何の変哲も無い日本酒だが、この宴会が終わったら本格的に銘酒を作ろうかと考えているのだ。

楽しみだ、と思いながら縁は枝豆を茹でる手を休めない。塩は海に出たときに作ったものを振り掛ける。縁も一つまみしてそのおいしさに頬を緩ませる。

「おい店主！酒が足りねえぞー！」

「こっちは枝豆が足りねえよ！早く持ってきてくれー！」

あいよー！と元気よく返事をする酒を、枝豆を待っている妖怪達のところに走り寄っていく縁。

その宴会は、日が出る時まで続けられた。

「これはまた酷いな・・・。」

朝になって周りを見てみれば死屍累々というかなんと言っか、皆酒に酔ってあられもない姿になって寝ている。その表情は皆うれしそ

うだ。

少し叱ってやるうかとも思ったのだが、その表情を見てその感情が失せた。苦笑しながら瓶を片付けると静かにその場を去った。

ガラゴロ、ガラゴロ。

「いつになったら原作のキャラクターに会えるのかな？」

ガラゴロ、ガラゴロ。

四杯目・かえるの神様（笑）

縁が屋台を引きながら旅をしていると、大きな湖にたどり着いた。湖の水はとても澄んでいたので顔を洗う。

ふと顔を上げてみると、遠くの方に何かぼんやりとだが建物が見えるのに気が付いた。なんだろうとその建物に近づく。

近くに来て見るとその建物が何なのか分かった。大きな鳥居に社。ここは神社だと見当が付いた。

鳥居の前で屋台を一度そこに置いておく。車輪が勝手に回らないようにそこらにあった石で車輪を固定すると前宮まで歩を進めた。

賽銭箱が目に入ったので、妖怪の連中から酒代として徴収しているこの時代のお金らしきものを何枚か賽銭箱に投げ入れて、二礼二拍手一礼。縁が願ったのは安全祈願。旅の間、戦闘能力がない縁は他の妖怪に襲われたら即人生に幕を閉じることになってしまう。そんなことはゴメンなので神社で安全祈願のお願い事をしたのだ。

よくよく神社を見てみるとここは唯の神社ではないらしい。神気、
といえはいいのか。何か神々しい気配に包まれている気がする。

妖怪になったからか、縁は神気やら妖気などは多少感じ取れるようになったのだ。その気配は宮の中から洩れているようだ。宮に近づくとつれ、神気が濃くなって縁の呼吸が乱れてくる。

しかし、ここまで来たからにはこんな強い神気を出す神様とやらの姿を一目見てみたい。そんな気持ちで

縁は宮の中に入るための扉の目の前までたどり着いた。

後はこの扉を開けて神様の姿を見るだけ。逸る気持ちを抑えて呼吸をできるだけ整える。そしてその扉に手を掛けて一気に開け放った！そしてその神様は

「ぐおー……ぐおー……」

寝ていた。しかも布団を蹴り飛ばしてだらしない格好で寝ていた。姿は少女のあれだが、如何せん神様という威厳が欠片も見当たらない。

目の付いた帽子を横に置いて枕を涎で濡らしながら、何の夢を見ているのか、頬を緩めた笑顔で寝ている。

その姿を見た縁は脱力した。神様のこんな実態を見たから、息苦しいほどの神気はどこかに消えうせてしまっていた。

「ぐえっ！……つちよ！……ぐるじい！離して！」

「駄目だよ！離したら君逃げるじゃん！絶対に離さないからね！」

「逃げない！逃げないから……はなじで！」

どうにか逃げないことを約束に首を離してもらった縁はその場で咳き込んだ。涙目になりながら縁は少女に話しかけた。

「……で、人間の子がなんで神社の宮の中で寝ていたんだ？」

「いや、私人間じゃないよ？」

「は？だったら妖怪か？」

「だから、私は妖怪でも人間でもなくて、」

少女はその場で胸を大いに張りながら尊大そうな雰囲気宣言した。

「私は神様なんだよっ！」

どどーん！と効果音が鳴りそうな感じだったのだが、言われた縁は
といつと。。。。。

「。。。。。。。。。」

「え、何その目。『何言っちゃってるのこの子、マジで痛いわー』
って言いたげなその目は!？」

冷めた目でその少女を見ていた。それはもう冷め切った目で見てい
た。さながらその視線だけで一人氷付けに出来るんじゃないかっ
て位に。

「いや、だって涎垂れ流しながら頬を緩めてだらしない格好で寝
ている人のことを神様とは言えなくね？威厳もクソもあつたもんじ
ゃないよ。」

「いやいや！私神様だから！本物の神様だから！信じてよー！」

ぼこぼこ涙目になりながらその少女は縁の腰辺りを叩く。さなが
らその姿は唯の少女がじゃれ付いているようにしか見えない。寝て
いたときもそうだがこの行動も神様を信じてもらえない理由の一つ

かもしれない。

「じゃあ何かやってみせてくれよ。神様らしいこと。」

「それをやったら信じてくれるんだね!？」

鬼気迫る表情で縁に詰め寄る少女。信じる、と言つや否や少女は湖のほうに手を翳した。

何をするんだらうと内心ワクワクしていた縁の視線の先の湖が、割れた。

比喩でも何でもなく、そのまんまの通り割れたのだ。さながらモーゼの奇跡のように。綺麗に二つに分かれた湖は少女が手を翳すのをやめると元に戻った。

「これで信じてくれるよね?」

えっへん!とまたもや胸を張る少女を見て、やっとこの少女が神様なんだと実感がわいた縁だった。

「私の名前は洩矢諏訪子。この神社・・・『諏訪大社』の神様をやつてるよ。」

「俺の名前は酒代縁。酒妖怪だ。一応酒屋をやっている。」

その後、宮の中に戻った縁と少女は自己紹介をすることに決めた。宮の中は意外に快適な空間だった。

「酒妖怪？また変な妖怪だね。」

「正確な種族は知らない。酒を作るのが俺の仕事だからそういうことにしてんだよ。」

適当に手をひらひら振る縁。諏訪子はケロケロケロと変な笑い声を

出して気になっていることを聞いた。

「ねえ、何で縁は私が神様だったのにタメ口で話しているんだ？他の妖怪は私と喋る時とかは絶対に敬語なのに。」

その問いに縁は『今更何言ってるんだ？』という視線を投げつけた。諏訪子は何かかっこいいことでも言ってくるのかと期待していると縁がその理由を話した。

「威厳もへつたくれもない神様に何で敬語を使わなきゃいけないんだよ。どうしても敬語を使わせたいのならば威厳を取り戻すことをお勧めする。」

まあ取り戻したところでタメ口は変わらんかな。と嘲笑いながら理由を話した縁。その理由を聞いた諏訪子は部屋の隅に体育座りをして畳にのの字を書いていじけていた。

「どーせ私は威厳のない神様ですよー・・・グスン。」

少しやりすぎたか？と思った縁は空間の裂け目を出してその中に手を突っ込んだ。その空間の裂け目が通じている場所は縁が酒を瓶の中に入れて保管しているところだ。

最近アレンジや大吟醸などに手を出している縁は結構な上物を二つの杯とともに引っ張り出すと、隅でいじけている諏訪子に杯を差し出す。

「わりいな、ちよつくら言い過ぎた。代わりといっちゃんあ何だが、酒奢ってやるから勘弁してくれ。」

「・・・・・・・・・・。」

無言で顔を上げてその杯を引っつかむ諏訪子。何も言わずに縁に杯を突き出すと縁は苦笑しながら杯に酒を注ぐ。どうやら許してもらえようだ。

自分の杯にも酒を注いで、差し出された杯と杯を軽く突き合わせて二人でこう言った。

『乾杯』

五杯目・神様って・・・何？（前書き）

この小説はシリアス一割ほのぼの9割で構成されています・・・多分。

五杯目・神様って……何？

「へ、戦争？」

あれから諏訪子と酒を飲み交わした縁はしばらくの間、諏訪子の方に滞在することに決めた。そして飲み交わした次の日、朝食を並べている縁が素っ頓狂な声を上げた。

「うん、まあ戦争なんていつでも私と相手の神様の喧嘩だよ。」

「神様の喧嘩って……戦争レベルなのかよ……。」

ちやぶ台に座りながら諏訪子は縁の単語に補足説明を入れる。朝食を並べ終わった縁はその補足説明にちよつと呆れていた。

いただきます、といって二人は朝食を食べ始めた。

「むぐ、美味しい。流石だね。」

「神様に褒められるなんて光栄だな。」

朝食を作ったのは縁。因みにメニューは白米に鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたしに味噌汁という立派な日本食である。

「まあ喧嘩だからね。結界張ってギヤーギヤーやるだけだから、縁も見ていく?」

「え、何。その戦争って公開されてんの?」

「うん、まあこの喧嘩が最終決戦みたいなモノだからね。結構な数の妖怪が来ると思うよ。」

「それでいいのか神様よ……。」

あ、でもカリスマも糞も無かったから大丈夫か。と心の中で呟いた縁は味噌汁を啜った。諏訪子は鮭の骨が上手く取れないらしく、悪戦苦闘していた。

「じゃあ見ていこうかな。」

「分かった！最高の特等席を手配するからね！私の勇姿を見ていけ！そして私が神様だと再認識させて崇め奉れ！」

あ、それが本音か。と思いながら諏訪子の鮭の骨を取り除いてやる。感嘆したような声を上げてお礼を言つと鮭を食べ始めた。哀れ諏訪子、君がカリスマを持つことは無いだろう。カリスマ（笑）

「えー、俺は諏訪子様が神様だつて分かつてますしー崇め奉つてますよ？」

「あからさまな棒読みで言われたつて説得力の欠片も見えないからね？！くそう・・・やっぱり本当の力を見せるしかないのか・・・」

ガクリと手と膝をつけて落ち込む諏訪子。縁は食べ終わった食器を手早く片付けて流しに持っていく。食器を洗っていると諏訪子が鬼気迫る表情で戦略を練っているのが視界の端で捉えることができた。

怖い。そう表現できるほどに険しい表情をしている諏訪子。それは対照に口笛を吹きながら食器を洗う縁。

喧嘩という名の戦争が始まるまで、後もう少し・・・。

「店主！酒一ダース売ってくれ！」

「こっちは二ダースだ！」

「はいはい、少し待ってくれ。」

現在喧嘩が始まる少し前。縁は空いた時間を利用して、諏訪子の宣言通り大勢来た妖怪達に酒を売り始めたのだが、これがどうにも大当たり。元々酒妖怪だと有名になっていた縁がいると聞いてまるで雪崩のように屋台に突貫する妖怪たち。それを涼しい顔で裁き続ける縁は流石というべきか。

「縁さん！おつまみ頂戴！」

「あ、俺にもくれ！」

「あいよー。あ、その妖怪！金払え！」

見るからに悪人面をしている一匹の妖怪が勝手におつまみと酒を持ち出して逃げていってしまった。戦闘能力皆無の縁にはそれを止める術は無い……のだが。

「手前え！縁さんのおつまみと酒を持ち逃げしようたぁいい度胸してんじゃねーか！」

「ヒヤッハー！万引き妖怪は消毒だー！」

「ちょっと待っててください縁さん。あいつをボコボコにしてくるんで。」

持ち逃げしようとした妖怪の目の前に何体もの妖怪が立ちふさがった。妖怪はどうにかして逃げようとするが、首筋を持たれてどこかの建物の裏に行ってしまった。連れて行った妖怪たちは縁の店の常連だった。グシャとかベキとか泣き声とかが聞こえてきた気がしたが、注文の喧騒でかき消されてしまった。

「ん？もうそろそろ戦争が始まる時間だね。」

「え、もうそんな時間なんですか？じゃあ見に行かないと。縁さん、酒有難うございます。」

お礼をいいながら集まっていた妖怪たちは戦争を見るために散らばっていく。店をたたんでいると諏訪子が縁のほうに向かって飛んできた。

「あ、いたいた！もうそろそろ始まるから着いてきて！」

「あいよー。」

諏訪子に腕をつかまれ空を飛んだ縁だった。

「……………で、ココが特等席ってやつか？」

「うん、そこなら喧嘩が壮大に見えるでしょ？」

「いや……………見えるけどさ……………ココは無いんじゃないかね？」

諏訪子の用意した特等席というのは、ぶっちゃけて言えば戦場のど真ん中だった。強力な結界は縁を囲うように半円球状に作動している。確かにココは最高の特等席なのだが……。

「俺の命の危険が危なくね？」

「日本語でok。」

結構焦っている縁。どうにか移動させて貰おうと諏訪子に言ったのだが、頑として譲らない諏訪子。どうやら自分の力を間近で見ているらしい。

頂垂れている縁をスルーしながら諏訪子は相手の神様が出てくるであろう場所に目を向けて怪訝な表情を浮かべた。

「おかしいな……来るのが遅い……。」

「寝坊とかじゃね？」

「……きつと遅れてきてカッコつけよつとしてるんだ！」

縁がふと思いついた理由を諏訪子は無視して勝手に決め付ける。と、古の戦場に風が吹き荒れた。その風は荒々しくも神々しく、それは神様の出す風と同じようである。

風は一箇所に纏まり、小さな竜巻になって土を巻き上げ粉塵とする。諏訪子も、縁も、他の妖怪達もが黙ってその光景を見る。そしてその竜巻が消え、粉塵が消えるとそこには一人の女性が佇んでいた。

髪は紫色、赤い服に紫色のスカート。背中には注連縄が円を描いて後ろに浮かんでいる。周りには御柱が何本か地面に突き刺さっているのが見える。腕を組んで目を瞑っている光景はまさにカリスマが漏れ出している。

「……………ああいうのが神様って言うんだぜ、諏訪子。」

「くううううう……………神奈子の奴、無駄にカリスマ発揮して……………」

ギギギとどこから取り出したのか、ハンカチをかみ締めて悔しがらる諏訪子。縁は神様らしい神様にあえてよかったのか、一服するためにタバコを取り出して吸い始めた。

そうこうしている内にその神様が目を見開き、宣言した。

「わが名は八坂神奈子！今ここに洩矢諏訪子との決着をつける為に来た！」

その宣言に一齐に沸き立つ妖怪達。縁はこれが神様のあり方だと言わんばかりの目で諏訪子を見ていた。その視線に唸りながら耐えている諏訪子は神奈子を見て眉を顰めた。

「……ん？ねえ縁。」

「ん、何だ諏訪子。もう負け宣言か？」

「違うよ！……神奈子の顔になんかついてない？」

そういわれてよくよく見てみると確かに顔に何かついている。何かの化粧か？と思った縁だったが、それをじっくり見てみると……。

「、」

「え、何で急にこれ以上無いまでに落ち込んでんのさ?!」

「……俺の中の神様が崩れていく……。」

何かに気づいた縁がズーンと落ち込んでいるのを見て焦る諏訪子。その間に神奈子は諏訪子に近づいて話しかけた。

「やっとアンタと決着がつけれるね。」

「ああそうだ、」

答えようとして振り返った諏訪子は、神奈子の顔を見て固まった。神奈子は？と首をかしげている。諏訪子は無言で縁に目を向けると縁も諏訪子のことを見ていた。

『神様って……何？』

『……ゴメン。』

そう視線で会話している二人を見てさらに首を傾げる神奈子。その顔に何がついているのかというと……。

『まさか冗談半分で寝坊って言ったのが正解だったとは……。』

『顔に涎のあとがついてるからね……。』

そう、涎のあとがついていたのだ。それはもうばつちりと。他の妖怪達は遠目だから気づいてないのは幸か不幸か。諏訪子は縁から視線を外して神奈子に目を向けると無言で口の端を指した。

何のことだろうと手を当てるとそれに気づいたのか、慌てて拭う神奈子。縁はどうか立ち直って神奈子に問いかけた。

「八坂様、つかぬ事をお聞きますが……。」

「え!?!……なんだ酒妖怪の縁?」

一瞬素が出ていたような気がしたが、それを無視して縁は聞いた。

「……寝坊しましたか?」

「……してない。」

「そうですね、有難うございます。涎の跡凄いですね。」

「それほどでもない・・・ハッ?!」

神奈子は我に返って弁解しようとしたのだが、縁と諏訪子は生暖かい目で神奈子を見ると諏訪子は肩に手を置いて、笑顔で言った。

「ようこそ、カリスマ（笑）の世界へ！」

「いやだあああああああ！」

シリアスな雰囲気だった古の戦場に、新たに入った神様（笑）の絶叫が響いた。

六杯目・神の戦い、宴、そして別れ。（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした！見苦しいですが言い訳を・
。

21日の更新後、すぐさまテスト期間に入ってしまった、11月中はテスト勉強の為にPCに触れられず、12月4日にテスト終了したので気を緩めた次週、まさかのインフルエンザに掛かってしまい、執筆できませんでした。今は熱が37度まで下がったので隙をみて執筆、投稿しました。インフルに掛かるとはいえ、これは自分の体調管理がなって居なかったせいです。本当に申し訳ありませんでした！そして熱が出ている状態で執筆したので・・・本文が・・・ウボアーな状態になっているのでご了承ください！

六杯目・神の戦い、宴、そして別れ。

「うう……諏訪子……私アイツに嫌なところ見られたよ……」

「まあまあ神奈子、涎が顔についていただけじゃないか。私なんて……」

と、二人で慰めあっている神奈子と諏訪子。よほど縁の『神様（笑）』の発言が堪えたのだろう、背中にどんよりとした空気を漂わせている。そして神奈子達をへこませた当の本人はというと……。

「んく……んく……ぷはあ！」

酒を飲んでいた。

空間を酒蔵と繋げて取り出した酒を杯に注ぎながら縁は二人に、

「なあ、まだ喧嘩始まんねえの？」

それを聞くと二人はスクツと立ち上がって顔を見合わせた。

「こうなったら私達の力を見せてやるしかないね！諏訪子！」

「おっさ！元からそのつもりだよ！」

ガシツと敵同士なのに力強く握手をする二人。一昔前のスポコンみたいに熱いな、と熱くさせている元凶の縁は暢気に一人酒を煽っていた。

握手を解いた二人は背中を向けて離れていく。およそ15mぐらいまで離れただろうか。自然と二人は歩みを止め、向き合っ

その顔つきは先ほどまでのそれではなく、真剣な面持ちで対している。

いよいよ始まるのかと観客の妖怪達の騒ぎも静まる。縁も酒を脇に寄せて雰囲気が変わった二人を見据える。

そして一陣の風が吹き、木の葉が舞う。葉は空で舞い踊り、二人の間に落ちた瞬間。

戦争が始まった。

二人は同時に飛び出し距離を詰める。神奈子の手には一振りの刀。諏訪子の手には大きな鉄の輪。

神奈子は手にしている刀で諏訪子を切り捨てる為に腕を動かす。まさに神速の速さで振るわれたその刀はしかし、諏訪子の鉄の輪によって弾かれた。

そのまま鉄の輪で胴を薙ぎ払おうとする諏訪子だったが、流石は神といったところか、弾かれて崩された体勢を一瞬で立て直し、迫り来る鉄の輪を防いだ。

火花を散らしてながら衝突の勢いで二人とも後ろに下がる。

やっと止まるや否や、神奈子が背中に背負っている御柱を上へ発射する。放たれた御柱は空中で少し静止した後、諏訪子に向かって落ちていく。

が、唯落ちていくわけではなかった。御柱はどんどん巨大化しながら落ちていた。

「そんなもの喰らうかつ！」

諏訪子はどんどん巨大化しながら落ちてくる御柱の間をすり抜けるようにして神奈子に接近する。そして諏訪子は霊力で編み出したのだろう、光球を神奈子に放った。

「チツ！」

舌打ちを一つして神奈子は御柱を目の前に壁のように落とす。派手な音を鳴らして光球は御柱に当たるが、罅一つ入らない。だが諏訪子はそれだけでよかった。神奈子は御柱を壁のように設置したため、一時的に諏訪子の姿が見えなくなる。そう考えた諏訪子は御柱を設置した瞬間飛び上がった。そして鉄の輪を手に持ち神奈子に突っ込むが、

「甘い！」

奇襲を見抜いていた神奈子が刀を抜き、鉄の輪を防いだ。鏝迫り合いが始まるが、二人は笑みを浮かべていた。

「やっぱりこのくらいじゃ駄目かー。」

「こんくらいでやられてちゃ神とはいえないからね！」

「でもまだ始まったばかり！」

「最後なんだから派手に豪華に！」

『それでも！』

『勝つのは私だ！』

鏢迫り合いが終わり、神奈子は地面に。諏訪子は空に。

二人とも笑みを獰猛な笑みに変えて相手を倒さんと動く。

まだ、始まったばかりなのだから。

二人の戦場だった場所で、大勢の妖怪達が酒を飲み、笑いあっていた。

その中心にいるのは戦っていた二人と縁。神奈子と諏訪子は屋台のカウンターに座り、縁は屋台の中で酒を出したり枝豆を茹でていた。

「いやー負けた負けた！やっぱり神奈子は強いね！」

「いやいや、私も危ない所が何度もあつたからね。一步間違えれば私が負けてたかも。」

結局、勝ったのは神奈子だった。しかし、負けたはずの諏訪子は晴れ晴れとした表情で笑っていた。縁は不思議に思つてその理由を聞く。

「楽しかったからいいんだよ!」「らしい。

縁は杯を拭きながらふと疑問に思っていたことを口に出した。

「そういえば喧嘩の最後つていたけど、何か賭けかなんかやってたのか?」

「うん、私が勝てば神奈子は私の神社の傘下に入って、神奈子が勝てばその逆。」

「まあそんなのは唯の理由付けだよ。唯喧嘩したかったただけなんだけどね。」

「理由付けて・・・それ意味あんのか?」

「あー、そういわれると意味は無いんだけどね。体裁だよ。」

そんなもんなのか、と縁は呟いて新たに酒を取り出して二人に渡す。

「そういえば俺、敬語使ったほうがいいのかね?」

それを聞いた諏訪子はパタパタと手を振りながら、

「いや、もういいよ。何かもうタメ口でなれちゃった。今更敬語を使われたって気色悪いだけだよ。」

「そうだね。私達の間を見せ付けて敬語にしてやろうと思ったけど。タメ口で慣れちゃったよ。」

「……そーかい。」

二人の気楽な理由に呆れながら枝豆を茹でる。茹で終わったら他の妖怪連中にも配る。皆の笑い声をバツクにその仕事を繰り返し続けている縁の顔は綻んでいた。

そうして夜は更けていった。

朝、酒を飲んだせいで誰もが地面に横になつて寝ている頃、縁は手際よく散らかつている食器を片付ける。

食器を空間の裂け目に仕舞い込み、いざその場を離れようとするとき、声がかかった。誰だ？と声のした方向を向くと頭を抑えながら起きた諏訪子と神奈子だった。

「あいたたた・・・もう行くのかい？」

「ああ、十分この地に留まったからな。そろそろ他の場所も見に行きたい。」

「あーうー・・・またいつでも来なよ？歓迎するからさ。」

縁はああ、と一言だけ言うと屋台を引っ張っていった。

ヒラヒラと背中を向けて手を振って。

ガラゴロ。ガラゴロ。

七杯目・落とし穴というものは(前書き)

変な所があるかもしれませんが、気にしないで読んでくれるとありがたいです。

あと今回は短いです。

七杯目・落とし穴というものは

諏訪子、神奈子との別れから数十年。縁は相変わらず屋台を引っ張って旅を続けていた。

この数十年の間で変わったことといえば、新しい酒を開発した事、おつまみの種類が増えた事、そして・・・

「
〜
」

「おいおい、そんなに動くなよ？落ちるぞー。」

縁の頭に乗っている小さな兔が旅のお供になったことだろうか。兔は機嫌がよさそうに縁の頭の上ではしゃいでいる。それをうまい具合に落とさないように手で抑える縁。

しかし兔は楽しげに縁の頭の上を這いずり回ったり、わざと落ちて縁に受け止められて見るからにはしゃいでいた。その様子に縁は苦笑を漏らした。

そんなやり取りをしながら歩く。ふと気づくと辺りはもう暗くなっており、静まり返っていた。月明かりを頼りに目を凝らして辺りを見回す縁。そして少し開けた場所に目が行くと、そこまで屋台を引

っ張っていった。

一旦兎を頭の上から下ろして屋台のテーブルに乗せる。屋台の車輪をそこらにあつた石で止めると縁は空間を開いて屋台の开店準備を始めた。

暖簾をかけて、提燈に火を点して、おつまみの準備をしていると明かりに誘われたのか、二匹の妖怪が屋台に近づいてきた。

「お、今日は俺達の貸切か？」

「ツイてるな。」

そついいながら暖簾を潜つて屋台の席に着く。縁はテーブルの上に乘せていた兎を回収して頭の上に乗せると注文を聞いた。

「注文は？」

「あー、あんまり強くない酒を頼む。それとつまみは……枝豆でお前は？」

「うーん、俺は……あ、そついえば旦那、新しいおつまみ出たん

「だっけ？それお願い。」

「了解。」

注文を聞くと縁はまず枝豆から取り掛かった。何度も何度も作ってきたその手に淀みは無い。沸騰した湯に枝豆を入れると縁は何処からか釣竿を取り出した。

餌を手早く針に付けると、空間を開けてその中に糸を垂らした。その行動に新しいおつまみを頼んだ妖怪は首を傾げる。

「何をやってるんですかい？」

「ん？ああこれか。おつまみの材料を取ろうとしてる……って言ってるそばから来たか。」

グイツと竿を撓らせかかった獲物を引き上げる、と出てきたのは……。

「イカ、ですか？」

「ああ、そつだ。」

針を手早く抜いてまな板の上に乗せる。釣り上げたばかりだから、元気良く逃げようとするイカだったがその身に千枚通しを刺されて身動きが取れなくなった。

釣竿を片付けると縁は千枚通しに刺されたイカの調理に入った。

包丁を入れて中からイカのワタを取り除く。そのワタに付いている墨袋を破かないように注意しながら取って足から切り離す。ワタは他の事に使うのか、残して置いて塩を塗って邪魔にならない場所まで動かした。

足を切り離されたイカの皮を剥いて中を水で洗って綺麗にする。幅を食べやすい大きさに切り取り、足も吸盤を取り除いて食べやすい大きさに切る。そして縁はさつき開いた空間ではなく、主に植物をしまいこんである空間の入り口を開いた。中から数年前にゲットした柚子を取り出した。

柚子の皮を剥くとその皮を千切りにする。木の器に切ったイカの胴体と足、千切りにした柚子の皮、酒と塩、そして酒を作ることを応用して作ったみりんをいれてよく和える。

丁度枝豆のほうも出来たようで、湯を切って塩を振る。そして枝豆と木の器を酒と一緒に妖怪達に出した。

「おお……これまたつまそうな……。」

「旦那、これはなんですかい？」

「これはイカの塩辛っていうおつまみだよ。まあ食ってみればいいな。」

言われるがままに塩辛に箸をつけて口に運ぶ。咀嚼しながら酒を口に含むと妖怪は驚きの表情を浮かべた。

「うわぁ……コレ酒にめちゃくちゃ合うな……。」

「あ、本当だ。柚子の風味がこれまたいい仕事してるな！」

そう感嘆しながら自分に出されたおつまみを食べながら酒を飲む。と、妖怪の一人が気づいたように縁の頭の上を指した。

「旦那、そういえばその頭の上に乗ってる兎はどうしたんですか？」

「ああ、それは俺も気になってたんですよ。」

コイツ?と頭の上を指すとコクリと頷く妖怪二匹。

「簡単な話さ、罨にかかって怪我してから俺が保護しただけだ。」

ホレ、と兎を降ろして右の後ろ足を見せる。確かにその足には包帯が巻かれている。確認が終わると、縁はまた頭の上に兎を乗せた。

「最近の人間は賢くなってきましたからねえ……。」

「そうだな。村の近くを通ると罨なんてざらにあるからな。」

「俺も一回人間の罨にかかったことがありますよ。まあすぐ抜け出せましたが。」

「それ、どんな罨だったんだ?」

「まあ落とし穴ですよ。落ちた先に尖った竹やりが置いてあったのには流石に鳥肌がたちましたけどね。」

おお怖い、と大きく身震いをする。丁度酒が空になっていたので新

しい瓶に取り替える。

「一歩間違えれば即死ってか？笑えねえ落とし穴だな。」

「ツたく、落とし穴ってーのは人間のガキがやるもんだろ。いい年こいた大人が殺傷能力付けた落とし穴を作るなってーの！」

その愚痴にハハハハハ、と笑い声を上げる縁。

その日、屋台からは愚痴の声と、笑い声が絶えることは無かった。

八杯目・兎と紫（前書き）

フラゲ回。

うーむ、どうにも原作がないと書きにくい……。早く原作に入りたいです。まあ無理な話ですが「ノフ（ン、ン）」

八杯目・兎と紫

白い兎を拾って一ヶ月。足の包帯を取ってみると既に傷は治っており、ピョンピョン嬉しそうに兎は飛び跳ねている。

その姿を微笑ましく見ながら屋台を引つ張る縁。その縁についていくように跳ねる兎はとても嬉しそうに見える。

ガタン、と屋台を鳴らして縁はある場所で屋台を止めた。

そこは竹が生い茂る竹林。穏やかな風が竹を、葉を揺らして過ぎ去っていく。

兎はどうしてココで止まったのかわからないようで、縁の顔を見ながら首を傾げている。

縁は何処から取り出した煙草を口に啜える。火打石で枝に火を付けてそれを火種にして煙草に付けた。

一息。煙草の煙を肺の中一杯に溜め込んで、吐き出す。そしてボンヤリとした目で竹林を見ながら言った。

「お前の怪我は治った。だからお前とはココでお別れだ。」

兎はその言葉の意味が理解できなかったようで、ピョンピョン跳ねて、縁の前までやってきた。縁は腰を屈めて兎と同じ目線になる。そして言い聞かせるように兎に話した。

「既にお前の怪我は治った。だからお前とはもう一緒に旅をする理由が無くなっちまったんだよ。だから、お前とはココでお別れだ。」

やっと意味を理解したようで、兎は焦ったようにピョンピョン跳ねて抗議をする。

どうして怪我が無くなったぐらいでお別れなのか？

もっと一緒に旅をさせてくれ。

そんな意思が兎の抗議から伝わってきた。だが縁は煙を兎にかけて抗議を止めさせる。とんとんと煙草の灰を落としてまた口に啜える。

「元々お前は野生の兎だ。これ以上俺と一緒にいると野生に戻れなくなる。野生は野生の生き方があるはずだ。お前はそれに戻らなくてはいけないんだ。分かるな？」

その言葉を聞いて、兎は顔を伏せた。自分でもそれが分かっているのだろう、だがそれを割り切れないからココまでこねている。

いつまで経っても自分から離れようとしないうに、ふむ、と顎に手を当てどうやったら兎を野生に返せるか考える。

と、縁は思いついたように首に掛けていた物を外して兎にかけた。それはつい最近縁が作ったにんじんのアクセサリーである。そのにんじんは先っぽが齧られていた。これは縁が完成したアクセサリーを兎に見せたら齧ってしまったのだ。

そんな思い出の品を縁は兎にあげた。かけられた兎は縁の顔とにんじんのアクセサリーを交互にみる。そんな様子が面白くて、縁は笑った。

「ソイツは俺からのお守りだ、幸運のな。まあお前が長生きすればまた会えるかもなあ。」

有得ない、と分かっているながらも縁は兎を突き放すためにそんなことを言った。そして縁は立ち上がって屋台の前に立つ。

本当は撫でてやりたかった。しかし、温もりは決心を鈍らせる。だから縁は唯立ち上がった。

「じゃあな。」

そういつて縁は煙を思いつきり吸い込む。兎は我慢できなくなつたのか、縁に近づこうとする。が、それは敵わなかつた。

縁は吸い込んだ煙を、なけなしの妖力を込めて吐き出した。妖力が込められた煙は辺り一帯を包み込むほどだつた。

そして、煙が晴れるとそこには誰も、何もいなかった。

兎はしばらくの間、辺りを跳ねながら捜していたが諦めたのか、とぼとぼと仕方なく竹林に入つていった。

自分のご主人に貰つた、にんじんのアクセサリーを揺らして。

それから数百年。迷いの竹林と名付けられたこの竹林で、先つぽが齧られたにんじんのアクセサリーをつけた少女が、ご主人と再会するのは、また別の話。

「うーむ・・・この別れ方はしまらんなあ・・・。」

ポン、と兎と別れたその場所から空間を引き裂いて縁は屋台と共に飛び出しながらそう呟いた。

実は煙で目くらましをした瞬間に縁と屋台の真下の地面に空間を空けて姿をけしたただけなのだが、どうにもこう姿を表してみると、締まらない。

とりあえずカッコいい別れ方をしたのだから、兎に見つからないようにサツサと縁はその場を離れた。

ツレが居なくなつたからか、少し寂しくなつた道中だが、縁は変わらずに見知らぬ土地で屋台を開いていた。

「あー、あの兎、居なくなつちまったのか……。可愛かつたんだがなあ……。」「

「野生は野生に戻る。コレは自然の摂理だ。その摂理を俺が壊すわけにもいかないだろう?」「

「店主の言つとおりだ。それはしょうがない事だろ。」「

良く兎を可愛がっていた妖怪がため息混じりに酒を煽つた。その話はもう終わりだと言わんばかりに酒を二人に出す。

「かぁー! やっぱり酒つていたら縁さんの酒だよな!」「

「それには同意せざるを得ない。」「

「ははは! そついつてもらえると酒屋冥利に尽きるよ。」「

気持ちよく酒を飲む妖怪に縁は笑う。と、縁の耳に誰かの足音が聞こえた。その音の方向を見ても、辺りは既に暗くなっている。どうもぼんやりとしか見えない。そして提燈の明かりがその足音の主を照らし出した。

その足音の正体は一人の少女・・・いや、幼女といったほうがいいかもしれない。白色の傘を持って、腰まで伸ばした金髪の髪を揺らしながらこちらにやってきた。

「やっとみつけましたわ、『妖怪の酒屋』、酒代縁さん？」

優雅な足取りで屋台の椅子までやってくると、自然と妖怪二人が空けた椅子に座る。

「え、何？俺そんな二つ名なんて付いてるのか？」

「ええ。曰く妖怪が妖怪に酒を出す、曰くその妖怪は酒を作り出すことしかできない下級妖怪、それでもあらゆる人外から愛される酒屋だと、ね。」

ふふふ、と笑うその幼女。その笑みは幼女の彼女がやるにも関わらず、どこか妖艶な雰囲気醸し出していた。

「まあそれはいいとして、縁さん、お酒を出してくれるかしら？」

「ん……まあいいけどよ……。」

うーんと提燈の火でつけた煙草を口の端で揺らしながら縁はその少女に問うた。

「嬢ちゃん、今いくつだい？」

「あら、女性に年を聞くなんて、いけないことですわ。」

「いーから、今いくつだい？」

「……まあいいでしょう。今は……ざっと三十年ぐらいかしら？」

人差し指を顎に当てて、考え込みながらそういった。それを聞いた縁は紫煙を吐き出して、

「あ、じゃあ酒は出せないよ?」

「……え?」

「だから、お酒は出せないって。」

「ちょ、ちょっとどういふことなの?!」

「嬢ちゃん、少し落ち着け。」

どうどう、とカウンターに身を乗り出してくるのを抑えてまた座らせる。説明を、と目で訴えかけてくる幼女に縁は何も言わずに屋台の横の壁を指した。そこにあつたのは・・・、

「『100歳未満の妖怪にはお酒を出せません』・・・ええ・・・
」?」

貼つてあつた紙を読んで呆然とした声を上げる幼女。ポンポン、と隣に居た妖怪二人が肩を叩いた。

「まあそういふこつた。残念だつたな嬢ちゃん。」

「100歳になつたらまたこの屋台にくるんだな。」

「づうづ・・・!」

ふくれつつらで縁を睨む幼女。クッククックと含み笑いを漏らしながら縁はコトンとレモン色の飲み物を出した。

「……………？コレは？」

「ん、せっかく俺を訪ねてきたんだ。がんばったで賞、かな？」

両手で杯を持ってコクリと飲むと、甘い、と呟いた。

「絞ったレモンを水で薄めて蜂蜜を入れた『蜂蜜レモン』。どうだい？」

「……………おいしい。」

気に入ったようでどんどん飲む少女。その姿をみて微笑む縁と妖怪二人。と、縁がパンパンと手を叩いた。

「さて、そろそろ店じまいだ。悪いけどね。」

「そうか、今日もいい酒飲めたよ。いつ見つけられるか分からんけど、また来るよ。」

「俺も行くぞ！」

良い酔い加減なのか、二人肩に手を回して去っていった。飲んでいた少女も杯をカウンターに置いて背を向ける、と縁が声をかけた。

「嬢ちゃん、名前は？」

「……紫、八雲紫よ。」

「そうか、紫……いい名だ。100歳になったらまた来な。サービスしてやるから。」

コクリ、と頷いて紫は闇の中に消えていった。

そして誰も居なくなつた屋台の店じまいをする縁。

「さあて、あと70年後が楽しみだな……。」

クスクスと思ひ出し笑いをしながら、縁は提燈の火を吹き消した。

八杯目・兎と紫（後書き）

超展開！

無理やりすぎる気もしますが・・・息抜き小説なので勘弁してくださいあ；

九杯目・少女（前書き）

グロ表現を入れました。苦手な人は回避推奨です。

九杯目・少女

異変に気づいたのは屋台を引っ張っている最中のことであった。

「なんだ……?」

普通なら気が付かないレベルの臭い。それを嗅ぎ分けられたのは、普段から食品の良し悪しを見た目や臭いで判断している縁だからこそであろう。

スンスン、と形の良い鼻を鳴らすと、やはり異臭が鼻に付く。何か胸騒ぎを覚えた縁は異臭の漂う方向へと歩を進めていった。

道を外れ、獣道を悪戦苦闘しながら屋台を引っ張っていく。進んでいくにつれ、その異臭が強くなってくる。鉄の臭いが縁の鼻を刺激する中、縁は開けた場所に出た。

「………は?」

そこは緑などなく、紅が支配する空間。

あたり一面血の水溜りで彩られた空間。そしてその水溜りに点々と

落ちていた赤黒い肉片。鋭利な何かで切られたのであろう腕、力任せに引き千切られたと思わしき脚、スタスタに引き裂かれ内臓が飛び出、人体のパーツが一部欠けている胴体。

縁は口に手を当てて咽喉の奥から出て来そうになる酸っぱいものを押さえ込もうとする。ココで縁がどうにか抑え切れたのは、肉片の前の持ち主が人外だったからであろうか。いくら人外と交流を何回も重ねている縁とはいえ、精神は平和な世の中で暮らしていた人間だ。そんな世界で暮らしていた縁にとって、血肉の光景は衝撃が強すぎた。

未だ吐き気を堪えながら縁は生存者が居ないかどうかを確認すべく、
一步を踏み出し

「え……？」

地を踏みしめたはずの足の裏から奇妙な感触が体の中を駆け巡る。まるで、硬いものを踏み抜き、そのまま中にある柔らかい物を磨り潰した……そんな感覚だ。

足の裏からなんともいえない、ゾクゾクしたような悪寒が体の中を走る。

気持ち悪い。ようやく押さえ込んだ吐き気がまた戻ってくるのを縁は感じた。そして、そのまま見なければいいものを、反射的に縁は視点を下にくらしてそれを見てしまった。

飛び出した眼球。その眼球から伸びる筋肉の筋。顎は吹き飛ばさたのか既に無い。縁が踏んだのは、頭。縁の足が突っ込まれている頭と足の間から見える、皺の付いたソレは

「う、げえ

！」

遂に吐き気を抑えきれず、体を丸めて地面に吐き出してしまった。ビチャビチャと汚い音をたてながら、血の上に落ちて醜いマーブル模様を作り出す。

胃液が逆流したせいで、咽喉がヒリつく。目の端に涙を浮かべて、胃の中のを全て吐き出した。

一刻も早くココから逃げ出したい。そう思った縁だが、そんな彼の耳にピチャリ、と音が聞こえた。勿論彼が発した音ではない。誰か、生きているのだろうか。

縁はグツ、と体を思い切って起こすと、屋台を置いて音のした場所に覚束ない足取りで向かった。

血溜まりに一人少女が仰向けに横たわっていた。

髪は美しい緑色、白い肌が破けた服の隙間から見えている。だが、何も破れた服の間から見えるのはそれだけではなかった。

赤い肌。いや厳密に言えば肉。それが腹部が大きく裂けて見えていた。明らかに致命傷だ。だが、彼女は死んではいなかった。

血の気の失せた唇からヒュー・・・ヒュー・・・と蚊の鳴くような音が洩れていた。何故明らかに致命傷だと分かる傷を負ってなお生きているのか。それは彼女が妖怪という種族だからだ。

妖怪は人間と比べると、身体機能や体の作りがまったく違うときがある。彼女は見た目は可憐な人間の少女に見えるが、その体の中には強大な力が眠っている。他の妖怪の中には頭を吹っ飛ばされてなおピンピンしている妖怪も居るくらいだ。

そして妖怪は人間には無い強い自己再生能力をもつものが居る。自己再生能力といったって、限度はあるが、それは人間と比べると比較にならないくらい強いものである。

だが、それはあくまでも限度の範囲内の話である。限度を超えればいくら再生しようとしても出来ないし、仮に再生できたとしても直に適切な処置が必要になる。そう、今の彼女の状態のように。

彼女は限度を超えた怪我を負ってしまった。適切な治療をすれば助かるだろうが、今ここには誰も居ない。彼女を助けてくれる存在などココには居なかったのだ。

辺りは血だらけ、在るのは肉片。この状況は彼女と相手の妖怪達が作り出した惨劇だ。誰も助けに来ない。仮に来たとしても、それは

血肉の臭いにつられた野獣共が、他の妖怪達だろつ。どちらにせよ、彼女は死ぬ。

だが、どうあがこうが死ぬ定めと分かっているながらも、彼女は僅かな力を振り絞ってその場から離れようとしていた。

ギリツ、と手が白くなるほど力を込めてその場から逃げ出そうとする彼女の目には涙が流れていた。

「死にたくない……死にたくない……！」

それはか細いながらも魂からの叫びだった。生物全てがもつその感情は、妖怪である彼女にも存在していた。

そんな彼女に耳に、

ピチャリ……ピチャリ……

「!？」

ゆっくりとだが血溜まりを進む、そんな音が聞こえた。その音を聞いた彼女はこれ以上ないくらい焦り、体を動かそうとした。だが、

傷の痛みと血が抜けすぎたせいで力が入らない。

そうしている間にも足音は進み、そして彼女のすぐ傍で止まった。

とつとつ脳にまで血が行かなくなったのか、目の前が霞んできた。自分を見下ろしている奴が誰だか分からない。

そして彼女の意識は闇に呑まれた。

パチ、パチと薪が燃えて繊維を千切る音が目の前から聞こえる。その音を聞きながら縁はぼんやりと揺れる炎を見つめていた。

思い起こされるのは、昼の出来事。自分自身も何者かも分からぬ血

に染まり、誰のものかも知らぬ肉を踏み、そして

チラリと横に視線を滑らす。そこに居るのは血溜まりに沈んでいた少女だ。血溜まりに沈んでいたところを縁が助けたのだ。

余り振動を与えないようにしてその場から離れ、近くにある川まで屋台と一緒に運んだ。血を濡れ布巾で洗い落とし消毒、包帯を巻いた。治療技術も知識も無い縁にはコレが精一杯だった。

今はよく眠っている。縁は少女に何も異常がないことを確認すると、視線をまた炎に戻す。

額と目を隠すように手を当てて、クソツと小さな声で悪態をついた。

覚悟ができていなかった。それが彼の心中を占めている。ココは過去の時代、しかも大昔だ。そんな所に警察などが存在しているはずも無い。ましてや殺しがご法度などという生易しい法律など存在するわけが無い。

分かっていて。分かっていてなのに、自分はその現実から目を背けていた。店に来る妖怪と楽しく喋って、そのことを忘れようとした。酒造りにのみり込んで、その現実から逃げようとした。

だが、逃げられる筈も無く、ココで逃げてきたツケを一気に突きつけられた。しかも人間ではなく日夜仲良くしている妖怪が殺される現場だ。

縁はもう一度、クソツと悪態を付く。それは誰に向けても居ない、自分に向けたものだから。

覚悟を決める。死を受け入れる。それがこの時代、この世界で生きるためなのだから。

パン！と自分の頬を叩いて渴を入れると、杯に入れていった酒をグイッと一気に飲む。アルコール濃度が高い酒だったため、熱い。だが、この熱さが過去の自分との決別をした、と縁は感じていた。

「……………ん……………」

モゾモゾと少女が起き出してきた。が縁は近寄らない。下手に近寄って警戒心を刺激してはいけなかったからだ。

「起きたか。」

「！」

その声をかけると少女は一気に頭を覚醒させる。と同時に少し離れている距離を更に離そうとしたが・・・、

「痛ッ・・・・・・・・。」

「まだ動かないほうがいい。閉じかけた傷口がまた開くぞ。」

そう諭してやると、少女は動くのを止めるが、こちらを睨んでいる。その睨みを飄々と受け流しながら、縁は酒を飲み続ける。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

沈黙がこの場を支配する。と、少女が未だこちらを睨みながら、

「何で私を助けたの？」

「そりゃあ傷だらけで生きてたら助けるに決まってるだろ。」

「可笑しな話ね。妖怪が同種族でもない妖怪を助けるなんて。貴方、今私に殺されても文句は言えないわよ？」

ゾワ、と少女から殺気が洩れる。杯に入っている酒が波紋を呼び起こす。殺気の重圧によって押しつぶされそうながらも、縁は虚勢を張る。

「やれるもんならやってみろよ。まあその怪我で出来るならな。」

「・・・・・・・・クソ。」

自分の怪我の酷さを再理解したのか、少女は悪態を吐くと布団の上に倒れ伏した。縁は焚き火の火に当てていた鍋から作っていたお粥を救い上げて少女のところに持っていく。

「ほら、飯だ。」

「・・・・・・・・。」

少女はフイツと顔を逸らし、お粥に目もくれない。縁はガリガリと頭を掻く。再度勧めるが結果は同じ。うーむと頭を捻っていると、

グウゝ・・・

縁の腹の音ではない。チラッと少女のほづを見れば、

「・・・・・・・・・・。」

顔は見えないが耳が真っ赤になっている。腹がなったのにも関わらず、未だそっぽを向き続ける少女に縁はクスツと笑うと、その場にお椀を置いて離れると、敷いておいた布団に潜り込んだ。

「俺は寝る。」

目を閉じて暫くたつとカチャカチャと何かの音が背後から聞こえる。その音に縁は再度クスクス笑うと今度こそ本当に意識を睡魔に委ねた。

そんなことが在った日から一週間ほどたっただろうか。少女も一週間の間で少し丸くなったようで、縁と一緒にご飯を食べるようにな

「でも・・・！」

「お前と俺は妖怪さ。生きてりゃそのうち会える。その時まで生きるよー。」

一方的に会話を打ち切ると、縁はサツサと屋台を引っ張っていった。

少女は一人ぼっち。誰も彼女に関わろうとしない。その強大な強さゆえに。少女もそれをわかってたからか、誰とも関係を持つとうとしなかった。そう、しなかった。

そんなとき現れたのが、彼。

勝手に自分を助けて、勝手に自分の治療をして、勝手にご飯を作って、勝手に自分の領域へと踏み込んできた。

最初はそんな彼の行動に嫌悪感を持っていた。が、時がたつにつれ、そんな嫌悪感は跡形も無くなっていた。むしろもつと彼と一緒に居て、いろんなことを話したかった。

自分は不器用だから。恥ずかしがり屋だから。本当は甘えんぼなのに。自分が一人で生きていくために築いた仮面で彼を阻んでしまった。

そして、彼との別れ。この時、少女は縁の後を追おうとしたが、出来なかった。それは彼に嫌われてしまうのが怖かったから。

彼の屋台が視界から消えた瞬間、少女は唐突に理解した。

ああ、私は本当は誰かと関わりを持ちたかったのか。

彼と関わった彼女はいつの間にか仮面で隠し、忘れていた自分の本心を思い出した。

誰かと関わる、それはとても大事なこと。その大事なことを思い出した少女はふふふつと柔らかく微笑んだ。

それを思い出させてくれた彼に感謝する。そして、少女は

「私があんなに強い人よわいに心を奪われるなんて……ねえ？」

彼を思い出して紅くなった頬に手を当てる少女。いつの間にか、自分の心は彼に奪われていた。コレもまた、居なくなっただからこそ分かるものだろうか？

まあそれはどうでもいい。彼は言った『生きていれば会える』と。だから私は強くなる。誰にも負けないぐらい、強く。そうすればきっと生きて彼とまた会える。

そう決心し、少女
笑んだ。

風見幽香は、太陽のように微

十杯目・都の噂、そして陰陽師

ある茶屋にて

「おい聞いたか？都の話！」

「あん、都がどうかしたのか？」

「その様子じゃおめえさん聞いてねえな？都に住んでるべっぴんさんの話だよ！」

「聞いたことねえな……。」

「何でも都にそりゃあもうすんげえべっぴんさんが澄住んでるんだよ！」

「ほお……。」

「その美しさといったらこの上ないらしいぞ！毎日毎日名のある貴族様が求婚に来てるらしいからな！でも求婚に来てるのは別に貴族様だけじゃあねえ！……誰だと思っつ？」

「さあ・・・？その話を聞いたことのない俺じゃあ分かるわけねえだろ。」

「バカ、おめえそこは適当でもいいから答えるんだよ！・・・まあいい。求婚に来てるのは貴族だけじゃあねえ、なんと！あの帝様までも手紙を書いて求婚を申し込んでるんだよ！」

「あの帝様が！？そいつは本当か！？」

「おうよ、人伝いだが信用できる奴からの情報だからな。だが求婚してるのはいいが、中々そのべっぴんさんが首を縦に振らないんだ。」

「あの帝様からの求婚を断ってるのか！？それはかなり不味くないか？」

「ああ、今は手紙を書いて求婚してるだけだが・・・何時か命令を出して強制的に自分と結婚させるんじゃないかな・・・？」

「美しすぎるのも考えものだな・・・でもそんなべっぴんさん、一目でいいから見てみてえなあ・・・。」

「そいつは無理な話だな。都に住んでるし、第一俺ら平民がお目通りかなう相手じゃないだろ。」

「だろうなあ・・・ああ、一目でいいから見てみたいもんだ・・・。ああ、そのべっぴんさんの名前は知ってるのか？」

「ああ、確か名前は

『なよ竹のかぐや姫』」

「へえ。」

近くに居た男の杯の、酒が揺れた。

「へえ、ココが都か……。」

厳しい検問を無事に通り抜け、都の様子を一目見て縁はそう一息ついた。

一言で言うなら賑やか。都に来るまでに通った村や町などとは比べ物にならないほど賑やかだ。人の往来が激しく、あちらこちらから声が聞こえてくる。建物などの作りもまるで違う。貴族の家などがたびたび見受けられる。

とにかく縁は人の往来の邪魔にならないように道の片隅に移動する。こうしてみるとやはりそれなりに高級感漂う人間が歩いているのが分かる。

と、都の現状を把握するのはここで終了。縁は腰から藍色の巾着を

取り出して中を覗く。が、中にあるのは底に残ってる塵芥。簡単に言えば路銀が尽きたのだ。

縁は巾着を腰に戻して頭を抱える。最近どうも酒代をツケにしていたのがここにきて響いてきたらしい。ツケといっても月末に返すという意味ではなく、また来たときに払う、という意味でのツケだ。

空間を裂いて食料などを取り出してもいいのだが、生憎ここは都。何処で誰が何を見てるか分からない。それに

「陰陽師もいるしなあ……。」

チラリと視界の隅に白い服を着た集団を捕らえる。黒い帽子みたいなものを被ってる。……アレはどう見たって陰陽師だ。

「あん？縁さんアンタ都に行くつもりかい？」

「縁さんだったら大丈夫だろうが……陰陽師にだけは気をつけてくださいよ？」

「陰陽師にだけは妖怪だって気取られちゃダメだ。もう何体も仲間が殺られてる。」

『そこで陰陽師の中でも特にヤバいのは

』

つい最近店に来た妖怪が言っていた話が脳裏に蘇る。白い袴をはいた陰陽師の中でも一際異彩、いや強大な力を放っている人間を見る。

「アレが、安倍晴明……。」

『そこで陰陽師の中でも特にヤバいのは、安倍晴明って奴だ。アイツにだけは会うだけでもダメだ。他の陰陽師とは格が違う。大妖怪すら葬られてるんだ。』

大妖怪。

妖怪の世界でも特に力を持つ妖怪をそう呼ぶ。大妖怪は大抵能力持ちで、何処かの種族のトップに立つ妖怪だ。いくら低級妖怪や中級妖怪、上級妖怪が束になって襲い掛かろうが瞬く間に殲滅してしまう程の実力を持った、そんな大妖怪を。

『葬った……？』

『ええ、それだけの実力者だ。縁さん、本当に気いつけてください』

『。』

止まっていた呼吸が戻ってきて、縁はその場に崩れ落ちた。酸素を肺の中に取り込む。

見逃された。自分が力の無い妖怪だから？他の妖怪の所に案内させるため？否、どれも違う。唯の、気まぐれだろう。

往来する人が不思議そうにこちらを見ているが、構わず呼吸を整える。未だ少し震える足を叱り立ち上がる。

この世界に来てから初めて死ぬかと思った。屋台に寄りかかって空を見上げる。空では自由に鳶が飛び回っている。

「もうアイツにだけは会いたくないな……。」

縁はそうポツリと呟き、路銀を稼ぐために酒屋に向かった。

「ん、コレぐらいあれば十分かな。」

縁は先ほどと比べ随分と太った巾着を持ちながら満足気に頷いた。酒屋に自分の酒を売りに行ったのだが、思ったより高く売れた。これは路銀にしても嬉しいし、作り手である縁にとっても嬉しい。

ほくほくしながら縁はとりあえず腹の虫をどうにかしようとする。近くの茶屋に向かった。さつき安倍晴明と会ったせいで体力をだいぶ消費してしまった。甘いものが食べたい。

屋台を邪魔にならない所に置き、赤い座布団の敷いてある椅子に腰を下ろす。営業用のスマイルを浮かべながら注文を聞いてくる店主に縁はいくつかの団子を頼んだ。

簡易的に巻いた煙草に火をつけて吸う。煙草を作るのも面倒くさい作業だ。早くキセルが出て欲しいなあ・・・とぼんやり考えていると、頼んだ団子が運ばれてきた。茶と一緒に受け取りパクリと一口。

うまい。甘すぎもせず、かといって味が無いわけではない。むぐむぐと租借しながら茶を啜る。茶との相性もバツグンだ。流石は都に店を構えるだけはある。

様々な人間が通り過ぎていくのを眺める。平民や貴族、遊女などもちらほら見える。と、縁はあることに気が付いた。

貴族がある一定の方向にしか歩いていない。しかも大掛かりな荷物を荷台に引かせて、だ。不思議に思った縁は茶屋の主人に聞いてみた。

「なあ店主さんよ。何で貴族様が向こうにしか歩いていけないんだ？」

「ん？お前えさん知らないのかい？明日あの『かぐや姫』とのお見合いがあるんだよ。今日は機嫌取り、といったところか。『かぐや姫』の爺さんが婿にふさわしい者を見定めるらしいからなあ。どうなることやら。」

「へえ、『かぐや姫』ねえ……。」

「アンタも一度見てみるといいよ。滅多に人前には出てこないけどね。」

そういうと店主は他の客の注文を聞きに行ってしまった。縁はあいも変わらず流れ続ける人波を眺め続ける。

団子を食べようとして手を伸ばしたが、もうなくなっていた。店主に勘定を頼もうとすると、何か少女と話している。

とにかく勘定をしてもらわなければならないことには変わらない。近くに近くによるとその話が聞こえてきた。

「だから、食べた分のお金を今出してくださいよ。」

「だから、財布を忘れたっていつてるでしょ！今から取りに帰るから待っててっていつてるじゃない！」

「それで逃げられたら元も子もないでしょうよ。貴族様の子供だからって特別扱いしませんよ。」

「ぐぐぐぐ。。。」

どうやら財布を忘れたようで店主と言い争いをしていた。少女の方はどうやら貴族のようだ。だが、店主は頑なに財布を取りに戻らせに行かせない。

「（なるほど、金目の物目当てか。）」

さっきから店主の視線が少女の金になりそうな物に向いている。どうやらその金品を出させて儲けようとしているらしい。

汚い。元は人間の縁だが、コレは汚い。人間とは違う種族になってから分かる、人間の汚さがここにあった。

縁はぼりぼりと頭を掻くと、未だ少女と言い争いを続けている店主の前に巾着の中の金を多めに落とした。店主は突然現れた金に驚く少女が後ろを振り向きこちらを見やるが、無視して店主に言い放つ。

「これで俺が食べた団子と嬢ちゃんの団子の勘定を頼む。」

何か言いたそうに店主は口を開くが、縁はそれを阻んでまた言い放つ。

「ああ、釣りはいらん。」

釣りはいらぬ。という言葉に店主の目の色が変わる。少女の金品よりは劣るが、十分な儲けだ。店主はしかめっ面からニヤニヤ顔になるとへこへこして縁と少女の勘定を済ませた。

とつとと店から出ようとした縁の服の裾が引つ張られる。振り返ってみると案の定あの少女だった。

「あ、あの、お金ありがとうございました。おかげで助かりました。」

「何、気にすることは無いよ。男は女にいいところを見せたがるものだからね。」

フツと縁は笑いかける。やっぱり断られた少女はそれでも食い下がって裾を離さない。

「あの、お礼をしたいので家のほうに来てもらえませんか？」

「ん？礼を期待して助けたわけではないんだけど。お礼なんていいよ。」

「でも……じ、じゃあせめて私の団子のお金だけでも渡したいので家に……。」

「んー、じゃあご好意に甘えるとするか。じゃあ案内してもらってもいい？」

少し考え込んでそう結論を出すと、少女の顔が晴れた。どうやらそんなに礼が出来ることが嬉しいらしい。裾を離すと少女は縁の隣にたって先導し始めた。と少女が縁に話しかける。

「あの、お名前のほうは何と……。」

「あ、言ってなかったかな。縁、酒代縁っていうんだ。嬢ちゃんは？」

「縁さんですね。私は

私は妹紅、藤原妹紅っています。」

十一杯目・妹紅(前書き)

何か急いでやったせいか、雑。そこらへんを踏まえてくださいお願い
いたしますorz

十一杯目・妹紅

近くに置いてあった屋台を回収して妹紅の先導を頼りに妹紅の屋敷へと向かう。

道中妹紅は縁に興味が沸いたのか、縁に質問を投げかける。

「縁さんはその屋台で何をしているんですか？」

「んー、簡単な食事場みたいなものをやってる。ほら、屋台だからいろんなとこにいつて商売してるんだよ。」

「へー、今までどんな所にいったんですか？」

「そうだねー……」

次々と出てくる質問に、縁は嫌な顔一つせず答えていく。一応自分が妖怪だということは伏せておく。それに関係する質問もうまくはぐらかしながら歩いていくと、妹紅がおもむろに手を上げて目の前に見える屋敷を指差す。

「あの屋敷です。」

「・・・おお。」

思わず感嘆の声を上げてしまった縁だが、それもしょうがないことだろう。目の前にある屋敷は周りに建っている屋敷と見比べてみると段違いに豪華で大きい。巨大な門の前には屈強な門番が二人佇んでおり、この屋敷がどれだけ大切なものが伺えられる。

こんな大きな屋敷に住んでいるお嬢様を助けたのか、と縁は冷や汗を垂れ流す。妹紅はドンドン進んで行く。あわてて縁は屋台を引っ張りながら付いていく。

「今帰ったわ。」

「お帰りなさいませお嬢様。」

門番の二人が揃って妹紅にペコリとお辞儀をする。縁が妹紅に追いつくと、門番は縁をジロリと睨みつける。その視線に気が付いたのか、妹紅は門番に説明をする。

「ああ、この人は私が困つてるところを助けてくれた縁さん。警戒しないで。」

そう妹紅が言うと、門番達は睨みつけるのを止めて縁に向かって頭を下げる。

「申し訳ありません縁殿！お嬢様を助けていただいた御仁とは知らずにご無礼を！お許しください！」

「え、いや、あの・・・気にしてませんから。頭を上げてください。」

「ハッ！」

タジタジになりつつも縁は門番に頭を上げるように言うと、門番達は二人揃って頭をすばやく上げる。先程の対応とは天と地との差がある。

妹紅はそんなやり取りが終わるのを見計らって門番達に門を開けるように命令する。それを聞いた門番達はすぐさま門を開ける。

ギギギ・・・と重々しい音をたてながら門が開いていく。が、開くのは少しの隙間だけ。多分警備等の問題からだろう。全て開けてしまつとこの巨大な門の性質上、閉めるのに時間がかかる。その隙に誰かが入ってしまうということがありえるのだ。

まあこんな屋敷に忍び込んだところで即つかまるのがオチだろうけど。と勝手に考察を終えると、門の中に入る。屋台は門番達が預かってくれるそうだ。

中に入ると庭が最初に目に付く。良く整備された庭に目を奪われつつ進んでいくと、ちらほらと人が目に入る。誰も彼も妹紅に対して敬うように挨拶をする。妹紅はそれを軽く返して進んでいくのを見ると、やはりお嬢様なんだということが感じられる。

どうやって話が伝わったのか、縁に対しても丁寧に挨拶をしてくる。へこへこ腰を低くしながら縁は妹紅についていくと、ある部屋に着いた。

ガラガラと障子を開けると、そこやはり豪華な部屋だった。入ってと言われたので縁は少し及び腰になりながら中に入る。

「ここが私の部屋なんですよ。」

少し照れながら話す妹紅。年頃の女の子だからだろうか、男を部屋に上げるのはやはり恥ずかしいところがあるらしい。

「へえ、結構豪華なんだな。」

「こんなに豪華にしくなくても良いと思うんですけどね。」

そんな愚痴を零しながら、妹紅は机の中を漁る。と目当てのものを見つけたのか、縁の前に戻る。手に持っているのは巾着袋。どうやら先程言ったとおり、団子代を払うつもりようだ。

「じゃあ団子代を……。」

「はいありがとうございます……ってコレ多くない?」

「いえ多くないですよ?」

コテンと首を傾げる妹紅。縁の手の中にある金は妹紅が食べた団子代以上の金がある。それを問い詰めようとすると、口到人差し指が当てられる。

何も言わないで、妹紅の目はそう言っているような気がした。人差し指が離れると、縁は開きかけた口を閉じる。妹紅はその行動をみて少し微笑む。縁は代わりに開けた口からため息を漏らすと、先程から気になっている事を妹紅に聞く。

「なあ、これだけの広さの屋敷なのになんで人が少ないんだ?」

そう、縁が気になっていたのはそこなのだ。

他の屋敷よりも大きなこの屋敷の中で会った人が異様に少なかったのだ。屋敷を掃除する人も、庭を整備する人も、屋敷の関係者がほとんどいないような気がしたのだ。

「……………」

妹紅は微笑んでいた顔を崩し、一気に不機嫌になる。巾着を机の上に放り投げ、肘掛に凭れ掛かるとその理由を明かした。

「『なよ竹のかぐや姫』……………って知ってますよね？」

「ん、噂には聞いたことがあるな。何でも絶世の美女だとか。」

「その『かぐや姫』にお父様がお熱なの。明日お見合いがあるから、その準備をしにしているの。屋敷の人が出払っているのもそのせいなんです。」

「あ……………」

絶世の美女、男にとってはぜひ自分のものにしたいが、女にとっては思いを寄せている男を取られるということに他ならない。妹紅も大事な父親を絶世の美女であるという『かぐや姫』に取られて不機嫌になっているらしい。

「まったくお父様ったら、あんな女に高価な貢物を何度も何度も上げて・・・昔は私を可愛がってくれてたのに・・・。」

ブツブツと今まで溜めに溜め込んだ愚痴を吐き出していく妹紅。

「縁さん、やっぱり縁さんも『かぐや姫』を自分のものにしたいか思ってますか？」

「おおっ、突然話の方向が俺に。」

「いいから答えてください。」

有無を言わさない迫力で詰め寄られて、縁は本心を吐き出す。

「んー、俺はそうは思わないな。唯見てみたいとは思っけど。」

「・・・なんでですか？」

「・・・なんでっていわれてもなあ・・・そうとしか言いようが無いんだ。」

これは本心ではない。縁は妖怪、かぐや姫は少なくとも妖怪ではないだろう。人と人ならざる身。永遠に交わることの無い道だからだ。

妹紅は少し疑わしげな顔で縁を見ていたが、それを本心と取ったのか、満足したような顔で元の位置に戻る。

ホツと一息ついて前もって持ってきた酒を取り出す。杯に酒を注いでいると、妹紅が興味深げに酒を見るのが目に入った。

「それお酒ですか？」

「おう、妹紅みたいなお子様は飲んじゃいけない飲み物さ。」

「私はもう16です！」

「残念、俺は20にならないと酒は飲ませないんだ。」

あくまで人間の場合で、だが。まだ人間相手に商売を始めてはいないが、始めるのなら人間は20歳になってから酒を飲ませようと考えているのだ。

頬を膨らませてぶーたれている妹紅を尻目にドンドン酒を飲む縁。持ってきた一升瓶を飲み干す頃になっても妹紅はまだぶーたれてたむしろ酷くなっているような気がする。

「うー！私にも少しぐらいお酒飲ませてよー！」

先程まで敬語で接していたのが嘘のようにぶーたれている。ぺちぺちと縁の腿を叩く姿からはお嬢様ということが受け取れない。

なにこの生物なまものかわいい。

と、適当にあしらっていた縁だが、ある一つの案が浮かんだ。それはどうやったらかくや姫に会うかという課題をクリアできるかもしれない案だ。

飲みかけの酒の杯を妹紅にチラつかせる。妹紅はそれを受け取ろうと手を伸ばすがその手が触れる瞬間に杯が離れてしまう。

またぶーたれようとした妹紅に、縁はある取引を持ちかけた。

「なあ妹紅、明日のお見合いに

、
」

十二杯目・かぐや姫 輝夜（前書き）

文がggaggaggでもあまり気にせず寛大な心で見てくださいね！

十二杯目・かぐや姫 輝夜

ガラガラと数え切れないほどの荷台や馬車が、ある屋敷を目指して進んでいた。その目的は唯一つ、『かぐや姫』と結婚をするため。

その為だけに自分の持てるだけの財産を使い、その為だけにいまままで愛してきた妻を捨て、その為だけにあらゆるものを切り捨てた。

そこまでの事だから、きつと自分を選んでくれるに違いない。そう、誰もがそう信じてやまなかった。

だから歩みを止めない。止めることができない。もう既に、引き返せないほどのところまで歩を進めてしまったのだから。

そのことを自覚しないまま彼らは断崖絶壁への道を、胸を張り続け、悠々と闊歩し、そして落ちて行くのだろう。

縁はそんな貴族達を哀れな目で見ながら横で進む牛車に目を向ける。そこには妹紅と妹紅の父である藤原不比等がいるはずだ。

縁は皆が慌しくなっている昨日のうちに、妹紅に頼んで自分を従者の一人に加えてもらったのだ。もちろん誰にも気づかれないうちに。

それが縁の作戦。自分が『かぐや姫』を一目見るために考え出した案だ。もちろん妹紅には協力してもらおう代わりに酒を飲ませたあげた。まさか一杯で潰れるとは思わなかったが。

今頃は牛車の中で頭の痛さに唸っているころだろう。自業自得である。

と、そんな馬鹿なことを考えている内に、目的の館が見えてきた。

やはり『かぐや姫』が住んでいる館というだけはある、その大きさは妹紅の家にも劣らないほどだった。次々と館の中に入っていく貴族達。縁もそれに続くように入っていた。

次々と屋敷の人らしき人間が貴族達を丁重にもてなし、宛がわれた部屋に案内される。不比等も妹紅も案内はされたが、別々の部屋だった。恐らく見合いをする人間と、そうでない人間とで分けたのだろう。

その事に妹紅は少し意見があるようで、宛がわれた部屋で少し不機嫌そうに眉をひそめていた。

縁は部屋の隅っこで待機。と、妹紅が急にスクツと立ち上がり、縁の肩の着物を引っ張る。

「さあ、『かぐや姫』を見に行きましょう。」

「え、今から？早いなー。」

「早いほうがいいときもあるんですよ。さ、行きましょう。」

妹紅に急かされるまま、縁は腰を上げて外に出る。妹紅の服装はいつもの豪華な服ではなく、質素なものになっていた。多分、他の人たちにバレないようにするためだ。

障子を少し開けて、通路に出る。通路はガラガラだ。きつと『かぐ

や姫』に会うためにおめかしでもしているのだろう。だがそれが逆に好都合。

そろりそろりと慎重に足を進めて奥に進んでいく。妹紅曰く、『偉い人とかは大体奥のほうにいるんですよ』だそうだ。

角に差し掛かり、顔だけを出して通路を覗く。と屋敷の女中が慌しく此方に向かってきていた。

やっべ、と小さく呟くと、縁は近くにあった誰もいない部屋の中に妹紅を抱きかかえて飛び込んだ。背中に回した手で障子を音もなく素早く閉めると、外からは見えないような位置に移動する。

といても見えないところなんて一人分しか入れないところしかないわけだ。そこに隠れた妹紅は思いつき縁に抱き寄せられるわけだ。

それは初心な少女には少々刺激が強すぎたようで、妹紅は顔を思いつきり赤らめる。心臓が早鐘を打つように鼓動が一気に早まった。

抱きしめられているため、布一枚越しに縁の胸板に顔を押し付けられており、縁の匂いが鼻の中に入ってくる。年頃の男との交流が少なかった妹紅に、男の匂いは新鮮すぎた。

「もう少し、我慢してくれ。」

縁の声と共に、吐息が妹紅の耳を攪る。思わず声を上げそうになっ
てしまうが、それは口に手をあてることで抑えた。

やっと女中が行ったようで、縁の腕から開放される妹紅。未だ顔を
赤くしたまま妹紅は縁に顔を見られないようにして障子の外にでた。
縁もそれに続くようにして外に出る。

「妹紅、顔が赤いけどどうかしたか？」

「な、なななんでもありません！大丈夫ですから早く行きましょう
！」

裏声でそゆ早口に捲し立てると、妹紅は縁を置いていくようなスピ
ードでドンドン進んでいってしまった。

はて、と首を傾げながらも縁は妹紅の後を追っていった。

「（ここが『かぐや姫』の部屋っぽそだな。」

「（そうですね。．．．いよいよ、か．．．）」

屋敷の一番奥。その障子の前に、縁達はたどり着いていた。中にいる『かぐや姫』に声が聞こえないように、小声で声を交わす。

妹紅は父が入れ込むほどの女性を見たいが為に、縁は伝記上の人物を見たいが為に。

心臓を高鳴らせ、その目的の人物を己の網膜に焼き付けようとするために、縁と妹紅は障子を少し開けて、隙間を覗いた。

そこに見えた光景は

「あー見合いとかマジかったるいわー。ていうか何で私がそんな事しなくちゃいけないのよ……まったく……お爺様もお婆様も事を大きくし過ぎだって……まったく……。」

「さあて、部屋に戻りますか。うん。」

「そうですね、着物も着替えなきゃいけない

、」

ガラガラ！ ガツ！ グイツ！ ピシヤツ！

「さて、お二人さん。何か見ましたか？」

「何かあったの？」

「俺の履歴には何も無いな。」

「そうですね、冷や汗すごいですね。」

『そそそそそそれほどでもない。』

所変わってここはあのかぐや姫の私室。なのだが・・・

上座に座るは美しい黒髪を腰まで伸ばし、職人の手によって織られたであろう着物を着こなすかぐや姫。しかし、その性格は見た目とは相反しているようだ。

男が座るような姿勢で胡坐をかき、肘掛に思いつきり体重をかけて頬杖をつく。人形のように整った顔は唸るように眉が顰められ、トントンとリズムを刻むように、もう片方の手の指で膝を叩く。

下座に座るは、先ほどまでかぐや姫の私室を無断で覗いていた妹紅と縁。キチンと正座をしながら小刻みにガタガタ震えている。

と、ここでかぐや姫が口を開いた。

「……どうしてここまで来たの？」

「えー……っと、それはなんといいですか、好奇心というもので……。」

「へえ……好奇心如きで私の本性がバレたと？」

「……申し訳ありません。」

いつそ清々しいほどまでに綺麗な土下座をする妹紅に縁。当のかぐや姫というと、目を閉じて膝を叩き続ける。と、叩くのを止め、大きく息を吐いた。顔を上げて、と一言。

「もう別にいいわ。どうにもならないことだし。いまさら忘れろー、なんて事も無理だしね。」

「……本当に申し訳ないです……。」

「いって。それにしても、まさか来たのがあの有名な藤原不比等

殿の娘さんだとはねえ……。」

ピクリ、と父の名前に反応する妹紅。かぐや姫はそれを気にせず続ける。

「ま、大方見合い相手の私を品定めに着たんでしょう？アンタは姑かつーの。」

うぐ、と凶星をつかれて思わず唸ってしまう。それを見ながらかぐや姫はニヤリと笑いながら、

「で、私の本性を見て、どう思った？失望した？激昂した？」

自分の本性を暴かれたのにも関わらず、笑いながら自分の印象を尋ねるかぐや姫。それを聞かれた妹紅は、静かに息を吐き、そして凜とした声色で言った。

「確かにあのかぐや姫とは思えないほどに言葉遣いも、性格も酷いものだと思います。」

その告白を聞いてやっぱりね、といった表情をするかぐや姫。ただ、と妹紅が続ける。

「私と同じ年齢だつて聞いてたので、やっぱりかぐや姫様も女の子なんだなあって少し嬉しかったです。」

微笑むように言葉を綴る妹紅に、かぐや姫は面食らつたように表情を変える。その妹紅の思いを聞いて、縁はクツクツクと喉の奥で低く笑つた。

「え？ちよつと、私何か変なこと言いましたか？」

「いいや、それは俺に聞くことじゃあないだろう？それは彼女に聞くべきだ。」

スツと視線を前にズラすのを見て、妹紅もつられて視線を前に戻すと、そこには先ほどまで貼り付けていた笑みではなく、心の底から笑みを浮かべていたかぐや姫がいた。

クスクスと袖で口を隠しながら笑つかぐや姫に、妹紅は恐る恐るといった表情で、

「あのー……。」

「ああごめんなさい。ついおかしくって。」

「おや、それはどういう意味ですかね？」

そう縁が楽しそうに聞くと、かぐや姫は笑うのをやめて、微笑を妹紅に向けた。

「いや、ね。私にそういったのは貴方が初めてだったから。嬉しかったわ。私、この家にいた時からお爺様やお婆様が大切に育ててくれたのは有難かったけど、他の人とはあまり関わりがなくなっただけね。」

こうやって同じくらいの子と話すのは本当に久しぶりなの。と言った。それは今までお嬢様なのにも関わらず、外に出ているんなものを見てきた妹紅とはまるで逆の生活だった。

かぐや姫もやはりお嬢様なのだから、多少の貴族の遊びは嗜んだ事があるだろう。が、それはやはり『高貴な貴族様』が遊ぶ遊びなのだから、飽きもするだろう。何せ、かぐや姫は『月から来た罪人』なのだから。

『不老不死の薬である蓬莱の薬を服用した』という罪。だから月の人々はかぐや姫を月から『汚らしい地上』を牢獄代わりとして送った。・・・確かそういう御伽噺だったはずだ。

だったら、目の前にいる彼女がいるということは、月には文明がある、ということだ。ちょっと見てみたいという衝動に駆られたが、それは胸の内に静かに閉まっておく。

と、そんなことを考えている内に一人に進展があつたで、妹紅は背筋をピンと張って、かぐや姫に向き直った。キョトンとするかぐや姫に、妹紅は手をスツと差し出すと、口を開いた。

「だったら、今日、ここで私と友達になりませんか？」

「え？」

思わず声が漏れてしまったかぐや姫に、妹紅はさらに言葉を続ける。

「友達になったら、また一緒にお話もできますし、一緒に遊べます。そして何よりも、私が貴方と友達になりたい。」

真剣な表情で語る妹紅。かぐや姫は少し、固まっていたようだったが、フツと笑うと、差し出されたその手を取った。

「私も、貴方と友達になりたい。いろんなことを話したい。いろんな遊びをしてみたい。」

「……よかった。」

真剣な表情を崩し、破顔する妹紅。よほど緊張していたのか、握られた手の力が抜けていく。

「私の名前は、蓬萊山輝夜。輝夜って呼んで。あ、後敬語は無し。せつかく友達になったんだから、ね？」

「輝夜、ね。わかったわ。これからよろしくね、輝夜。」

二人とも両手で相手の手を包み込むように手を添える。縁はその光景を目に焼き付けていると、ふと廊下の方から物音が聞こえてきた。それはまるで人の足音のようで。

「あ、まっず。そろそろお見合いの時間が始まるわ。」

「え、どうしよう……どうやって抜け出せばいいの？」

下手に抜け出そうとすれば、今廊下から此方にきている人にぶつかり、何故輝夜の部屋にいたのか問答されるだろう。あわあわする妹紅に輝夜は大丈夫、と胸を張った。

後ろにある掛け軸をめくる輝夜。とそこから現れたのは、人一人通れそうな抜け穴だった。何か妹紅が言う前に、輝夜は抜け穴に妹紅を押し込んだ。

「ここは私しか知らないから大丈夫よ。また来るときはここから来てね。」

妹紅にそう言うと、奥に押し込んだ。次は縁の番だと目で訴えかけてくる。あいよーと返事をして抜け穴に近寄り、と輝夜から声がかかった。

「貴方の名前は？」

その問いに、縁は一瞥して。

「酒代縁、唯の酒屋さ。」

返事も待たずに、縁は穴の中に入っていった。

十三杯目・楽と哀

輝夜と妹紅が友達になって早一ヶ月。最初のほうはやはり妹紅のほうに萎縮してぎこちない友達関係だったが、一ヶ月も経つとそんなぎこちなさも無くなって、二人と対等な関係で接していた。

輝夜が外に出れないため、いつも妹紅と縁は秘密の抜け道を伝って輝夜の部屋に入っていた。無論、家の人には無断で、だ。

だが見つかるようなことはまったく無い。何故なら家の人ですら輝夜の部屋には滅多に近づかないからだ。それは輝夜のあまりの美貌に召し使いなどが会うのを躊躇うからだ。輝夜に会うのは大体が輝夜を育てた翁と婆だ。

その二人も、今は家にはいない。輝夜に求婚を申し込んでいる貴族の連中と、さらには帝まで手紙で求婚してくるので、その対処に忙しいのだ。だから輝夜の部屋に近づくものはこの家にはいないと言うことである。だから・・・

「相手のゴールにボールをシュウウウウウウウウウウ！超！エキサイティン！」

「ちょっと、それふぁーるでしょ！縁さん、あれふぁーるですよね？！」

「蹴鞠のルールなんぞ知らんし、今お前らが何の遊びをしているのかすら分からん俺に意見を求めるな。」

どこかぎこちない横文字を使って縁に必死にアピールする妹紅だが、縁はバツサリと切り捨てる。その対応にぶつくさ言いつつ鞠を捨て地面に置く。

そのまま助走をつけるために後ろに下がった。対する輝夜は腰を落として両手を開いて構える。輝夜の後ろには紙を使って作った四角い枠。

最初はゆっくりと、そして段々と速く鞠に近寄り、そしてその鞠を輝夜に向かって、蹴った。

全体重を乗せて蹴られた鞠は、見るからに形を歪ませて枠の縁内に叩きつけられた。壁に紙の枠が貼られているため、鞠は叩きつけられた反動で転がりながら妹紅のほうへ戻ってきた。

いわゆる現代でいうPKなのだが、ボールが鞠だし、何故か鞠が蹴られて向かう方向はいつも輝夜や妹紅に当たりそうなのだ。ギリギリで当たらないけど。

先ほども枠内に鞠が蹴られたが、通ったところは輝夜の脇すれすれ。しかも妹紅の舌打ち付き。

何故か仲良くなったついでにライバル関係までついてきてしまったようだ。どうしてこうなった。

だが、ぎこちなく遊ぶよりは、このように自由に遊んだほうが楽しいに決まっている。本人達がどう思っているかは知らないが。

「今度は私の番ね。さあ覚悟しなさい妹紅！」

「ペなるていえりあ外からのしゅーとは絶対に決めさせない！」

ちなみに妹紅が何故横文字を使っているのかというと、これは輝夜が教えたからだ。確実に入らぬ知識だが、教えてもらっている本人がいいのならいいのだろう。

「そつえば輝夜。貴族の連中に出した五つの難題ってどうなった？」

「え？どうなるもこうなるも無理でしょ。」

「龍の頸の玉に仏の御石の鉢、火鼠の皮衣と燕の子安貝、拳句の果てには蓬萊の玉の枝だったっけ？父様に出したのは蓬萊の玉の枝だけど、蓬萊の玉の枝も含めてどれも全部伝説上のものじゃない。そりゃ無理に決まってるわよ。」

「妹紅、お前自分の父親がどうにもならないことで悩んでるのに、お前は気楽だなあ。」

「輝夜が人間じゃないって聞かされた時点でもう悟ってますよ。こうなったら父様には一回キツイお灸をすえなきゃ駄目だって思っただけです。」

そう、輝夜は人間ではないということは既に妹紅には話してあった。無論縁にもそれは話されている。それを聞いた妹紅といえば、『へーそうなんだ。』と至極どうでもよさげな反応だった。

鞆を脇に抱えて、縁と妹紅、輝夜は後片付けをして部屋に戻った。いつも座っている座布団に座ると、縁はお茶を入れて二人に渡す。

「さて、そろそろ輝夜の迎えが来る期日が迫ってるんじゃないか？」

自分用のお茶を入れて啜りながらそう言うと、輝夜は一瞬固まって目を細めて縁を見る。

「……どういふことかしら。」

「いやね、お前の話じゃ地上こちに来たのは自分の『罪』のためって言うてたろ。だったら『不老不死』であるお前をいつまでも追放させる訳にもいかないだろう？だからいつか迎えに来るんじゃないかって思ってたカマ掛けたんだが……。」

「……。」

凶星だったようで、輝夜は何も反論せずに肘掛に凭れ掛かった。

「え、輝夜、どういふこと？貴女月に帰っちゃうの？」

話に取り残された妹紅が唯一聞き取れたことに対して輝夜に問い詰める。輝夜は唯溜め息を吐くと、静かに湯飲みを置いた。

「確かに縁、貴方の言うように後数ヶ月もすれば月の使者が私を迎えに来ると思うわ。でもね、私は月には帰らないわ、絶対にね。」

「何でだ？」

「じゃあ何で私が数ある刑罰の中でこの『地上への追放』になったか分かる？それはね、私が望んでここに来たからよ。」

「望んで・・・？」

「そう。ここにすればいろんなことが起こる。月はね、『変わらないう』のよ。何もする必要が無いし、何不自由ない暮らしを私はしていた。でもね、私は『変化』を求めた。だから蓬莱の薬を飲んでここに来た。もうあんな生活に戻りたくないもの。」

月は不変の世界。何も変わらず、何も起こらない。その世界に住む住人はそれを当たり前だと受け取って生活をしているが、輝夜は違った。

千年や万年の時よりも今の一瞬を大切にする輝夜だからこそ耐えられぬ環境だったのだろう。それは地上に来てからも、翁などの過保護のせいであまり月の生活と変わらなかつたようだ。が、それは縁と妹紅によって世界が一変した。

「・・・まあ、帰らないって言うならそれでいいんだろうけど、じゃあどうやってその使者から逃げるのさ。」

「それは大丈夫。向こうに私の元教育係がいるから連携してどうにかするわ。・・・妹紅、私は帰ったりしないから安心しなさい。」

少し不安はあったものの、妹紅は輝夜の言葉にホッと一息吐いた。やれやれ、と縁は肩を竦めると、またお茶を啜った。

満月。妖怪達がもつとも力を発揮できる夜。

それは酒の妖怪である縁も例外ではない。が、大して力など発揮できないのだが。

トクトク、と漆器に自前の酒を注いで静かに杯に口をつけて傾ける。アルコール濃度が少し高い酒だからか、喉を通る液体が熱く感じる。

と、縁の耳に布切れが擦れる音が聞こえた。だが、縁はそちらに顔

を向けない。誰だか分かっているからだ。

何も言わずに縁の隣に座ったのは、輝夜だった。

何も言わずに杯を取り出して酒を注いでやる。輝夜もまた、何も言わずに酒を喉に流し込む。

そうして少しの静寂の後、輝夜が口を開いた。

「美味しいわね、このお酒。」

「自慢の酒だからな。」

「ほんとに美味しい。まるで何百年もおいておいたお酒みたいに美味しい。」

「そりゃそうだ。実際に何百年もおいてるんだからな。」

「流石ね。じゃあ何本かお酒頂戴な。妖怪さん。」

やっぱりバレてたか、と縁は内心溜め息を吐くと、いつも通り空間

から酒を何本か取り出して輝夜のほうに押し出した。

もの珍しそうに瓶の中身を覗く輝夜。少し揺らすと縁に杯を差し出す。縁は唯黙って酒を注いでやる。

縁が飲む。輝夜が飲む。縁が注ぐ。また飲む。そうした行為を何度か繰り返した頃、輝夜が口を開いた。

「私地上の妖怪のこと、詳しく知らないけど、寿命は普通の人間より長いはずよね。」

「ああ、どうやらそうらしい。」

「……ねえ、私が居なくなった後妹紅はどうするの?」

そう問う輝夜の顔には物憂げな表情が張り付いていた。心なしか声色も少し不安が入り混じっている。

永遠の命を持つ輝夜に初めて地上でできた友達である妹紅。自分が居なくなっていることは既に分かっている事、だが、親しくしている縁と自分が居なくなってしまうたら、妹紅はどうなる?」

輝夜はそれだけが心配で、それを縁に問うたのだ。縁は少し諮詢すると、口を開いた。

「さあな、俺は知らん。元来違う種族の者の生き方なぞ知るはずも無い。仮に知ってたとしても、同じ生き方はできんだろつぞ。」

「・・・でしょうね。」

「お前が居なくなったら、俺も姿を消す。妹紅とはいつか別れなきやいけない。唯その時期が早まったただけだ。」

杯を傾けて酒を飲み干した縁は飲みかけの酒瓶と輝夜を残して席を立った。酒を飲んでいたにもかかわらず、足元はしっかりして廊下を踏んで歩いていく。

輝夜は縁の後姿が消えるまで顔をそちらに向けていたが、やがて見えなくなると視線を満月に向けてほう、と息を吐いた。

月の世界の住人は、自分の住んでいた世界をみてどう感じているのか。

希望？絶望？
自由？束縛？
幸福？不幸？
孤独？自立？

残されたのは、酒瓶と満月、そしてその光に照らされる残酷なまでに美しい蓬莱人だけだった。

十四杯目・別れ、決意、絶望（前書き）

超！展！開！
気に（ry

十四杯目・別れ、決意、絶望

そんな輝夜とのやりとりから数ヶ月後の十五日の夜。ついにその時はやってきた。

時刻は宵の刻を過ぎたあたり。輝夜の屋敷には屋根に千人、築地上に千人と、兵士たちが一つの部屋を取り囲むようにして待機している。

その兵士は全て帝が遣わせた兵士たちだった。帝は輝夜が月に帰ってしまうことを知ると、自身の権力を用いてどうにか輝夜を月の使者から守ろうとしたのだ。

兵士たちは全員弓を持っており、翁の家の召使いたちの多人数にあわせて、あいている隙間もなくかぐや姫を守らせた。この守護する召使いたちも、男は弓矢を携え、母屋の内では女どもに番をさせて守らせた。姫は、塗籠の中にかくや姫を抱きかかえている。

翁は兵士達と召使達に月の使者が現れたら直ぐに射殺するよう命じていた。が、弓程度でどうにかなる相手ではないだろう。

強大な『科学^{チエ}』をもって必ず輝夜を月に連れ帰るだろう。だが、その使者の中に輝夜に通じているものがいればその限りではないが。

縁と妹紅は母屋の中にいた。輝夜がそれを強く希望したからだ。だが、そんな彼女の表情は少し硬い。

いくら月の使者を出し抜くことに成功するといっても、物事にはイレギュラーが混じりこむ可能性があり得る。例えそれが百万分の一の確立だとしても。

だから輝夜は縁と妹紅を傍に置き、その緊張を解そうとした。結果は重畳、とまではいかない結果になったのだが。

と、不意に輝夜の顔が外に向かった。

「
来た。
」

囁くようにポツリと呟いた。だがその囁きは母屋全体に広がる。緊張は一瞬で高まった、とその時、ピツチリと閉じられているはずの扉が不意に開いた。

その先にあつた光景は異常な光景だった。

先程まで月の使者を射殺すると意気込んでいた兵士達が全て戦意を失っていた。弓を取り落とし、お互いに顔を見合わせている。

その月の使者達は空を飛んでいた。その衣装は他に比べるものが無いほど美しく、同じく空を飛ぶ車を伴い、ふわふわと浮かんでいた。

その使者の中、王と思われる人が車を寄せて輝夜に語りかけた。

「輝夜姫、罪の期限は過ぎ去った。今一度月に一緒に帰ろう。」

微笑を携えて手を伸ばす王。輝夜は一瞬嫌悪の顔を浮かべたが、直ぐに戻して真剣な表情で返した。

「少しお待ちいただけませんか。今までお世話になったご両親に手紙を書きたいのです。」

「何故。こんな穢れたモノ達に別れなどを言う必要は無い。さあ一緒に帰ろう。」

そついい争う二人を見て、縁は違和感を覚えた。それは輝夜を連れて帰ろうとしている王に対してだった。いや、王だけではない。月の民全員に対しての違和感だった。

表情が無い。もっと詳しく言えば、『負の感情』が存在しないのだ。

見る人見る人全て同じ顔をしている。王に關しては表情の変化はあるものの、輝夜に突き放されているのに微笑を崩さない。

縁にはそれが恐ろしくて、怖くて堪らなかった。これが人間だとは到底思えなかったからだ。

と、ようやく王のほう折れたのか、輝夜は王に背中を向けて手紙を書き始めて。

王がいきなり倒れた。

その倒れた背中の方こうにいた人物。それは行列に参加していた者の一人だった。赤と青の悪趣味な服を着て頭にはチョコンと帽子を乗せている。

だが、王が倒れたにもかかわらず他の使者達が騒ぎ出す様子はない。不思議に思つて外を見てみると使者全員がその場に倒れ伏していた。ピクリとも動かない使者達。倒れたままの王。何が起きたのか分からなかった。唯、手紙を書き終えた輝夜は振り返り、緊張の息を吐き出すと同時に言葉を発した。

「良くやってくれたわ、永琳。」

「勿論。抜かりは無いですよ。」

ようやく思考が追いついてきた。彼女は輝夜が言っていた味方なのだ。どうやって使者全員を無力化したのか分からないが、すばらしい手腕だ。

そのまま輝夜は縁達に付いてくるよう合図した。縁は部屋の中で呆然としている妹紅を引っ張って外に出た。

外はあの時と同じ満月。雲ひとつ無い空。

「じゃあ、これでお別れね。」

「・・・・・・・・・・。」

「まったく、そんな辛気臭い顔しないの。親友の旅立ちのときにそんな顔しないでよ。」

困ったように笑う輝夜。妹紅は何も言わずに輝夜に抱きついた。グスグスと鼻を嚙る音が聞こえ、少ししゃくりをあげている。が、誰も何も言わずに時間が過ぎていく。

そしてやがて妹紅は輝夜から離れた。その目は赤いが、何かを決意したような表情だった。

「……………さようなら、輝夜。」

「ええ、さようなら、妹紅。」

別れの言葉。再会を誓う言葉など交わせる訳が無い。これが本当の別れ、のはずだった。

妹紅は輝夜の後ろを見て、何か気づいたように必死の形相で輝夜をその場から突き放した。

その瞬間、妹紅の体を閃光が貫いた。

時間がゆっくり流れしていく。閃光に貫かれた妹紅が実にゆっくり倒れていく。閃光の先を辿っていくと、使者の一人が何かの銃を向けていた。

輝夜が驚きに表情を変える。永琳はすばやく閃光の位置を確かめ、腰に差していた弓を取り出し、矢を放った。その矢は狙い過たずに使者の額に突き刺さった。

そして時間が戻ってきた。

「か、ぐ、ち……が……。」

「え？」

「か……ぐ、ち……が……傷つくのを……見たく……
なかつた……。」

瀕死の傷を負ってなお、笑みを無理やり作って笑う妹紅。輝夜は、馬鹿・・・と小さく呟くと永琳に顔を向けた。どうなのか。と目が言っている。

だが、永琳は無常にも顔を横に振った。悔しそうに、本当に悔しそうに妹紅を見る。そんな妹紅は、まだ笑っていた。

「か・・・ぐや・・・また・・・一緒に・・・遊び・・・たいね・・・」

「うん・・・。。。」

「ま・・・た・・・一緒に・・・ご飯・・・た・・・べたい・・・ね・・・。」

「うん・・・うん・・・！」

「また・・・一緒に・・・に・・・出かけ・・・たいね・・・。」

「うん……!!」

「また……一緒に」

楽しそうに、望みを話す妹紅に輝夜は頷く。それがたとえ叶わぬ願いだとしても、輝夜は頷き続けた。

と、縁はポツリと呟いた。

「蓬莱の薬……。」

弾かれたように顔を上げる輝夜と永琳。確かにその薬を使えば妹紅の傷は直せるだろう。だが、その代償として妹紅に永遠を生きる『罪』を負わせてしまう。

そのことに悩む。苦悩する。そして悩んで悩んで、答えは意外なところから出た。

「飲んで……も……い……いよ……。」

妹紅の口からそんな言葉が出た。既に顔からは血の気が引き、発す

る言葉すら掠れて聞こえにくい、が、ハッキリと言ったのだ。蓬莱の薬を飲むと。

「もし……永遠を……生き……ることに……なっ
ても……輝夜が……いた……ら……さびしく……な
……んて……ないから……。」

そう微笑む妹紅。輝夜はその言葉に少し、涙ぐんだ。そして永琳に顔を向ける。その永琳の手には小さな壺。

その壺の中身を妹紅の口の中に流し込む。すると見る見るうちに傷がふさがっていく。

これが、蓬莱人の力。そして、蓬莱人の『罪』。

それを妹紅は喜んで受け入れた。永遠の時を生きようと、輝夜トモグチがいれば乗り切れるから。

妹紅の傷は治ったが、目を覚まさない。どうやらショックで気絶してしまっただけらしい。そのことにホッとする一同。

そして妹紅を永琳が持ち上げて、伴ってきた車に乗せる。そして永琳が乗り、輝夜は縁に、

「妹紅は連れて行くわ。永遠のとき生きる蓬莱人になってしまった。既に人の世では生きられないでしょう。」

「ああ、それがいい。一緒にいてやってくれ。」

「……………あなたも連れて行きたいのだけれど……………」

「そいつはお断りだ。逃亡生活なんてしちまったら行脚なんてできやしないじゃないか。なあに、一人は慣れてる。さっさと逃げな、この騒ぎに陰陽師達が来るぞ。」

「……………ごめんなさい。」

そう言うと、輝夜は車に乗り、車は空を翔るようにして見えなくなってしまう。一人月の使者達の死体の山に残された縁は、陰陽師達が来る前に逃げようと急いで屋敷から抜け出そうとし、

「逃がすと思っているのかい、妖怪さん？」

本当の絶望が、口を開いて彼を飲み込む。

十五杯目・颯り、苦痛（前書き）

キャラ崩壊？注意報。

どうか寛大な心で（ry

十五杯目・颯り、苦痛

その声に反応するよりも早く、縁の背中に衝撃が走った。背中から吹き飛ばされる形で数メートルほど吹き飛ばされ、地面を転がる。

背中を強打されたためか。それとも着地の際に強く打ったのか。肺の中の空気が全て外に追いやられてしまった。

鈍痛と共に、どうにか酸素を体の中に取り込もうと浅い息を吐き続け、自分を攻撃した人物を見ようと体を起こす。その縁に。

冷たい刃が振り落とされた。

「ぎ、がぁアアアアアアア！」

「ん〜やっぱり悲鳴っていいのは良いねえ。心が洗われる様だよ。」

絶叫。縁の背中に焼け付くような激痛が走り回る。しかし、主犯らしき男の声はいかにも心地よさ気に紡がれる。

縁の涙でぼやけた視界の端に辛うじて移っていたのは白い装束。それはまさに陰陽師が着る装束そのものであった。

しかし、縁は陰陽師には気づかれていないはず。今までの生活を思い返し、そう結論付けようとした縁の脳裏に現れる恐怖。

安部清明。

「ここ最近都でうるちよろしてたねえ。妖力はほとんど感じなかった。でも、それで僕の目をごまかせると思ったのかい？」

やはり、気づかれていた。その現実には縁は一気に窮地に追いやられる。激痛に歯を食いしばって耐えながら、どうにか言葉を吐き出す。

「お、れ……は……何の……力も……ない……妖怪だ……
……俺……を……殺して……何にな……る……？」

それは見逃してくれることを見越しての発言だ。安部清明は強大な力を持つ人間。噂にも大妖怪を屠ったといわれているほどだ。だが、何故こんな力もない妖怪を襲うのだろうか。

縁はその疑問をそのままぶつけた。もしかしたら、興味が失せて自分を見逃してくれるかもしれない、そんな藁にもすがるその願い。
だが、

「何になる・・・ね。別にそんなこと考えたことないなあ。僕は唯、相手を叩き潰すことが好きだけさ。例えそれが殺しになるうともね。」

現実是非常である。

「叩き潰す・・・のが・・・好きだけ・・・だと・・・。」

「そう、別に相手の強さなんて関係ないのさ。戦って、肉を裂いて、骨を砕いて、絶叫を聞いて、怨嗟の声を脳髄に響かせる。ああ、何て素晴らしい事なんだ・・・。」

うつとりとした表情。だが、その表情からは想像もつかないほど心の根底はドロドロに腐りきっている。いや、狂っているのか。

現に、唯縁を突き刺しただけでは飽き足らず、刺さっている刃を揺らしている。ぐちゅぐちゅと泥を掻き混ぜるような音と、縁の言葉ににならない咆哮を聞いて、さらにその顔を恍惚に歪める。

妖怪の治癒能力は縁にも多少は備わっているのだが、清明はそれを見越してか、刃を絶えず動かし傷を治すことを許さない。

「いゝ悲鳴をあげるねえ。気に入ったよ、君は最後まで髑りながら殺してあげる。」

「が、ふ　　、　　．．．そ．．．れは．．．光え．．．いな
こ．．．つて．．．！つああアアアア！！」

闇を切り裂く絶叫。清明の足の裏が縁の肩を捉え、体重を掛けたのだ。グゴギヤ！と、いやな音と共に、骨と骨をすり合わせたような激痛が走る。肩の関節が外されたのだ。

背中痛みと相まっつてのた打ち回ろうとした縁だが、背中から体を貫通して地面に刺さって短刀と、清明の足がちりと縁の体を固定してそれを許さない。

「ハハハッ！もつとだ．．．もつと楽しませてくれよ．．．！」

歪な笑い声と共に、また縁を蹴る。縁が吼える。清明が晒う。そしてまた縁を蹴る。

何度目だろうか、そんな地獄のような責め苦を受けた縁の体は既にスタボロの雑巾のようになっていた。辛うじて妖怪の生命力で命を繋いでいるだけで、後一步でも踏み込みでもしたのなら、もう縁の命は終わりだろう。

少し荒い息を吐いて呼吸を整えている清明。そうして呼吸が整え終わったその顔には、もはや縁への興味などどこにも無かった。

「飽きたよ。つまらない。悲鳴ももうあげないし、何より抵抗がないよ。もっと抗ってくれなきゃこっちも燃えないよ……。ま、もういいや、死ね。」

簡潔にして単純にそう縁に宣言すると、腰に挿していた刀を抜く。そして片手で大きく振りかぶり、まるでギロチンのようにまっすぐ縁の首に向かって振り落とす。

縁は何もしない。何もできない。向かい来る死を見ることすら許さ

れず、唯受け入れるしかなかった。

何故こうなったのか分からない理不尽。手も足も出ないほどの圧倒的な暴力への恐怖。そしてどうにか状況を打破することのできない自分の不甲斐無さ。負の感情全てが混じり、溶け合い、巨大な重圧となって縁を内部から圧迫していく。

そして、それから逃げることのできるたった一つの道。振り下ろされる刃を受け入れること。

そしてその刃が、縁の首を、

「あらあら、それは困りますわ。」

突然、縁が倒れていた地面の感覚が無くなり、縁はそのまま落ちる。

最後にかすかに見えたのは、傘を差し、紫の服を着た女の人影だけ。

そうして、体が落ちると同時、縁の意識も落ちていった。

「何だ、あのゴミの代わりに随分と大物が来たじゃあないか。」

「大物だなんて、うれしい褒め言葉ですこと。」

「しかし、お前があのゴミを助けるなんて。何か縁でもあったのか？ま、ろくな縁じゃなさそうだけでもよお。」

「それもあるけど、あの方には生きてもらわなければならぬの。やっと見つけたと思ったたら、こんな事になるなんて、流石の私でも予想できなかったわ。」

「……まあどーでもいいや。ゴミが一つ無くなったただけだし。それよりも、お前がここに現れたっていう事は、僕に滅せられる気になったってことでもいいよなあ？」

「それとこれとは話が別よ。……まあ、でも、少しくらい付き合っ
つてあげるわ。」

「そうかいそうかい！ああ、いいねえ！ついにあのスキマ妖怪を叩き潰せるときが来るとは思わなかったよ！」

「・・・あら、少し言い方を間違えていたようね。」

「・・・ああ？」

「間違わなくてももらえるかしら？叩き潰すのは私で、叩き潰されるのはあなたの方って事よ。」

「ツツツ！！テメエに酔ってんじゃねえぞ、八雲紫イイイイイイイ
！」

「貴方は私の逆鱗に触れた・・・さあ、美しく残酷にこの大地から
往ね！」

十五杯目・颯り、苦痛（後書き）

何か清明がとあるの工場長みなくなっちゃった（・・）
言い回しに小説参考にしたからかもしれない（・・）（

十六杯目・八雲

深い、深い、闇の中。

不思議と体に痛みはない。清明に痛めつけられ、瀕死の重傷を負ったはずなのに、だ。

ボンヤリと浮かぶ思考の中、辛うじて頭の中を整理する。ここはどこで、一体自分はどうなったのかと。

辺り一面真っ暗闇。フワフワと奇妙な浮遊感を感じる体。そこから導かれる答えは……。

ああ、俺は死んだのか、と。

それが妥当な答えだろう。あれだけ痛みつけられ、黴られたのだ。死んでしまっても仕方がない。

溜め込んだ息を吐き出し体を楽にする。今まで飛んだことが無かったため、浮遊感に少し気持ち悪さを感じながらこれからどうなるかを考える。

普通は閻魔様の所に行く事になるのだろうか。あ、でも閻魔様が妖怪を裁いてくれるのかと。つーか大体閻魔様っているのかどうかすら分からんよなあ。

うーん、とあまりこの状態に危機感を覚えることも無く、さらに思考を進めていく。

死んだ後に行くっていったら三途の川ってというのが有名だよな。船の渡し守に六文銭渡すと船に乗せてもらえるんだよな。お金は…あるかな？いつも身に着けてるからあると思うけど…。

大丈夫かなあと違う所に不安を覚えつつ、ふと見ると闇の中に一点光が差していた。その光は段々大きくなっていき、そして縁の体を包み込むほどまで大きくなっていった。

うお、まぶし！

そんなアホな事をいいながら、光に視界と意識を奪われていった。

次に目を開けて見たのは木目の天井だった。

あれー？と見ている光景が彼岸花の咲いている川でないことに困惑しながら状況を判断するために体を起こそうとし、

「あ、がッ！…ぎ…！」

ビキビキと体に激痛が走る。起こそうとした体は体中に走る痛みによって遮られた。突然の痛みにも声を漏らし、倒れこむ。

今自分が寝ているのは布団だろうか。柔らかな感触がそれを教えてくれる。体を動かせないで目だけを動かして部屋の中を見る。

普通の部屋だ。特別高級感が漂うわけではないし、貧乏臭い部屋でもない。普通の人間が住む部屋だ。障子が張られた窓からは、太陽の光が障子を通り、優しい光が部屋を照らしてくれている。

俺は、死んだんじゃないのか？

体に感覚もある。あのような浮遊感もない。あれは夢だったのか？
体を動かせない今、できるのは考えることだけだ。

目覚めよ！俺の中の秘められし力！うおおおおおお！と心の中でそんなことを叫んでいると、不意に障子が開けられた。

そちらに視線を移すと、目に入ってきたのは眩い金髪とひよっこり出ている耳だ。耳といっても人間の耳ではない。狐の耳だ。

ともすれば、この少女は狐の妖怪なのだろうか。手に持っている手ぬぐいや包帯などの品から見ると、自分を介護してくれたのは彼女か。

「あ…。」

縁が目を覚ましていることに気が付いたのか、小さく声を漏らした。ピクン、とその反応と同時に尻尾と耳が少し動いた。

少しその反応に可愛いなあと思いつつ、縁は自分から話しかけることにした。

「やあ、君が俺を助けてくれたのか？」

「…。」

ふるふると首を横に振る。どうやら違っらしい。では誰が縁を助けてくれたのか。それを聞こうとして口を開こうとすると、既にその少女はいなくなってしまうていた。

パタパタと廊下のほうから音がする辺り、誰かに縁が起きていることを報告しにいったのか。ともすれば、次に少女と一緒に来る者こそ縁を助けたのだろう。

開かれた障子から聞こえてくる音に意識を傾ける。いつ来てもいいようにだ。だが、結果的にその行動は無意味に終わる。何故なら。

「あら、やっと起きたのかしら。」

急に廊下とは反対の方向から声がかかった。ビクン、と驚きに身を弾ませると同時、動いたことによって激痛が走る。

うづうづう…と痛みに悶絶し、やっと痛みが収まると、声のした方に目を向けた。

そこにいたのは妖艶な美女だった。紫の服にフリルを付け、リボンの付いた白い帽子をかぶっている。金色の瞳に先程の狐の少女と同じ金髪。服を押し上げる胸の膨らみが一層艶やかさを醸し出している。

身を乗り出すような形でこちらを覗く美女。空間系の能力を持っているのか、裂けた空間の中から出てきた。

空間から部屋の中に入ると、空間を閉じてしまった。一種の亜空間なのだろうか、だが、趣味が悪い。見える限りでも十数個の目玉が空間の中からこちらを見ていた。気持ち悪い。

「調子はどうかしら？一応、できる限りの手当てはしたのだけれども。」

「体を動かすと痛い。もうこれ以上ないってぐらい痛いけど、大丈夫だと思う。」

「そう、それならよかった。」

「所で、アンタ誰だ？」

「あら、私をお忘れかしら？」

そして微笑む美女。はて、自分はこの様な美女と今まで会ったことがあっただろうか。と今まで会った妖怪達の顔を次々と頭の中に浮かべては消していく。

「悪い、アンタみたいな奴と会った覚えが無い。俺が忘れていたんだ。謝るよ。」

「ま、憶えていないのもしょうがない事なのかしら。あの時はまだ子供だったし。ねえ、『妖怪の酒屋』さん？」

その呼び方、そしてその微笑み方。縁の脳裏に浮かび上がる一人の少女。その少女の名前は…

「八雲…紫…？」

「あら、憶えているじゃない。」

扇子を広げて口元を隠す。笑っているのだから、目元が垂れている。縁に憶えてもらっていたことが嬉しかったのだろうか。

縁の寝ている布団の傍に優雅に座ると、扇子を閉じた。

「これまた綺麗になったもんだな。前会ったときは月とスッポンだな。」

「あの時はまだまだ子供だったのよ、これが私の真の姿。」

能力も上手く使えるようになったしね、と付け加える。と、縁は気になっていることを口にした。

「なあ、お前が俺を助けてくれたのか？」

「お前、ではなく紫と呼んで。…ええ、そうよ。私が貴方を助けたの。」

「あの化け物から？」

「貴方を逃がした後、少し戦ったのだけれどもね。結局勝負が付かなかったのよ。」

ヒュウと小さく口笛を吹いて賞賛する。アレだけの強大な力と引き分けになるぐらいの力を彼女は持っているということだ。

「でも、俺を助ける益なんてあるか？精々酒を飲めるぐらいだぞ。」

その言葉に紫はクスリと笑うと、白く、美しい手を縁の顔に当てて滑らせる。撫でる様にして動くその手は少しくすぐったかった。

「さつきも言ったでしょう？約束を守って貰いたかったからよ。あれからずつと楽しみにしてきたのに、あんな風に死んでもらっちゃ困るわ。」

「理由がどうあれ、助けてもらったことには変わりないか……助かったよ。んで、ちょいと聞きたいんだが、あの子は？」

体が動かせないので、視線だけで紫に聞く。縁の視線の先には、先程手当ての道具を持ってきていた狐の少女が障子の隙間から此方を伺っていた。

あらあら、と紫は呟くと、その狐の少女を手招きして此方に寄せてきた。おずおずと遠慮しながらも部屋の中に入り、紫の傍に立つ。

「この子は私の式の藍、九尾の狐よ。ほら藍、挨拶。」

「は、初めまして…八雲藍です…。紫様の式をやっています…。」
よほど緊張しているのか、少し俯いて恥ずかしそうに自己紹介をする藍。

「初めまして、俺の名前は酒代縁。屋台で酒屋紛いのことをやっている下級妖怪さ。以後宜しく。」

「宜しくお願いします、縁様…。」

そう言うと、羞恥に耐え切れなかったのか、サッと紫の背中に隠れてしまった。その挙動を見て可愛いなあと思いつつ、紫に目をやる
と苦笑していた。

「御免なさいね。この子、まだ式になりたてなの。他人なんてほとんど知らないし、ましてや人間の男の姿をしたモノと話すのは初めてなのよ。」

「ああ、なるほど。まあ俺で慣れてくれれば幸い、って事か。」

「そうね。できる限り早くこの子には私の手伝いをして貰いたいから、いろんな経験をさせたいのよ。貴方の手当てをしたのもその一環。」

こっそりと背中からこちらを覗く藍の頭を優しく撫でながら紫は微笑んだ。撫でられている藍は、気持ちよさそうに、狐らしく瞳孔が縦に開いた目を細めている。

その光景に微笑ましさを感じながら、縁は一息吐いて能力を使う。長年使っていたお陰か、今ではノーモーションで空間の切れ目を出すことができるようになっていた。だが、それは平常時に限られており、清明の時のように、激痛を受けている最中に能力を発現することはできない。それは理屈云々の問題ではなく、縁にそこまでの余裕がないからだ。

人が体の中を刃物で掻き混ぜられながら筆で文字を書くことが出来ないように、縁もまた、そんな極限の状況下で能力など使うことなんてできないのだ。

「紫さんよ、俺今動けないから代わりにどれでもいいから酒を取り出してくれないかね。」

「あら、それは私と交わした約束の事なのかしら？」

「いんや、ちょっと違う。俺が飲むためだ。」

「……貴方、今自分の状態を理解してる？怪我してるのに酒を飲むなんて正気の沙汰じゃあないわ。」

「いいから、適当に一本取り出してくれ。」

縁の重みのある懇願に紫がついに折れた。洪々と裂け目に上半身を突っ込み、中から適当な酒瓶一本を取り出してきた。

「これでいい？」

「ああ、後は俺に飲ませてくれればそれでいい。」

「……………全く。世話の焼ける怪我人ね。」

溜息を吐いてそう呟くと、未だに背中に隠れていた藍にその瓶を渡した。渡された藍は藍で、一瞬訳の分からない表情をしていたが、直ぐにその意味を察知したのか、わたわたと慌てる。が、

「命令よ、藍。縁に酒を飲ませなさい。」

「えっ……はい……。」

これも経験の内なのか、でもそんなにビクビクする事無いのになあと思いつつ、口に添えられた瓶口を啜えて傾けてもらう。緊張しているため瓶が小刻みに上下に揺れる。だが、そんな事も気にせず縁はゴクゴクと飲み続け、そして瓶一本を飲み干してしまった。

ぷはぁ、と溜めていた息を一気に吐き、藍にお礼を言う。

「ありがとう。」

「い、いえ……。」

それ以上何も言えなかったのか、また直ぐに紫の背中に戻ってしまふ。苦笑しながら縁は目を閉じてゆっくりと深呼吸を始めた。

酒を飲んでから、体中に活力が漲るようだった。そう、それは酒を飲むときにいつも感じることだった。自分が酒の妖怪だからか、それとも自分の酒には何か不思議な力でも備わっているのか。どちらにせよ、今の縁には必要なことだった。

気休め程度だが、酒を飲むと傷の治癒能力が高まるのだ。だが、あくまで気休め程度である。あまり効果には期待していないが、無いよりはマシである。

数回深呼吸して目を開ける。飲む前よりは傷の痛みも少し収まった……気がする。

「呆れた。お酒を妖力に変えて治癒能力を高めてるのね。そんな発想誰もしないわよ。というかそんな事できるの貴方ぐらいよ。」

「あくまで俺流の治し方だ。ここまで大きい怪我はしたことないから効果は分からないけど、今まで小さい怪我ならいつもより早く直せた。だから、まあ、やっといた方がいいと思ってさ。」

ハハハ、と笑うと、紫もつられてクスクス笑う。

「まあ、怪我が治るまで約束はお預け。治ったときに、大いに振舞うよ。」

「楽しみにしてるわ。さ、藍。何時までも私の背中に隠れてないで、そろそろ行くわよ。」

「は、はい、分かりました！」

「それでは、ゆっくり養生してくださいませ。これで失礼しますわ、酒代縁様。」

「し、失礼しました、縁様！」

「おー。大いに励みたまえー。」

ペコリと優雅な動作と言葉遣いで空間の亀裂の中に消えた紫。その紫を追うように、慌てて礼をして藍もまた亀裂の中に消えていった。

急に静かになった部屋の中。縁は一人眠るためにゆっくりと目を閉じた。

ああ、怪我が治ったら紫と藍ちゃんに豪勢なお礼をしなきゃなあ。

どのようなお礼をするかどうか頭の中で考えているうちに、いつの間にか縁の意識は闇の中へ沈んでいった。

紫の創り出した空間、この空間を知る者はスキマと呼ぶ亜空間の中。

「さて、縁の意識も戻ったし、後は全快を待つだけね。」

「あ、あの……紫様。本当にやるんですか？」

「あら、私は本気よ。あの人なら信用できるし、嫌な雰囲気はしなかったでしょう？」

「え、ええ……そうですが……。」

「なら決まりね。貴方にはもっといろいろな経験を積ませなければならぬ。だからこの話がうまくいけば、貴方は式として大きく成長できるはずよ。」

「はあ……そうですね……。」

自分の式である藍が困ったように了承すると、紫はフッフと妖しく

笑った。

十七杯目・弟子

ゴキリ、と首を回して関節を鳴らす。

ようやく歩きまわれる程度に回復した縁は大きく伸びをして、ズキリと体に痛みが走る。

やはりまだ完全に回復していない為か、痛みの残る体を動かして部屋の外に出る。

障子を開けると太陽の光が縁の顔を照らす。久々に太陽の光が顔に当たって目を細める。太陽の出具合からして、どうやら早朝のようだ。

「誰か起きてないかな……」

呟いて家の中を散策することにする。結構家が広いため、散策のし甲斐がある。

紫や藍がまだ起きていない可能性があるため、できるだけ足音を立てないように移動する。やはり住んでいる人がいない為か、使われていない部屋が多い。その割に部屋が綺麗なのは紫の式神の藍が定期的に掃除をしているからだろうか。

と、ふと目に入ったある扉。なんとなく開けてみるとそこは台所だった。少し豪華な台所には誰もいない。

いつの間にか目の前に来た縁は自分の腕がうずうずしているのがついた。どうやら自分は料理を作りたいらしい。休んでいた間鈍っていた腕を取り戻すいい機会だ。

グイッと着物の袖を捲り上げ、白く、細い布で袖を留める。空間を裂いて手を突っ込んで取り出したのは長年愛用し続けている包丁とまな板だ。

長年使っているせいか、包丁は擦り切れて刃の厚みが無くなってしまい、まな板は板が細くなってしまった。

だが、縁は包丁もまな板も変えることなく使い続けてきた。包丁は砥石で丁寧に研いでやれば元の切れ味を取り戻すし、まな板は薄くなってもまだ使える。

愛着のある料理道具を手元に出した縁は、朝食に何を作ろうかと諮詢しながら材料を取り出した。

藍は基本的に早起きである。それは主である紫より遅く起きるわけにはいかないのと、朝食の準備をする為だ。

だが、朝食を作る、というのは式神になりたての藍にとっては少し難しいものがあった。基本的なことに關しては紫から教えては貰ってはいるのだが、如何せん経験が足りない。

ぎこちなく作った料理は不味くはないのだが、美味くもないといった平凡な味。作るのならばやはり美味しい物を作りたい。

だから早く料理に慣れて、早く美味しい物が作りたい。その一心で藍は早く起きて料理を作ることに精を出すのだ。

そして今日も例外ではない。藍は朝早く目を覚まし、手際良く布団を片付けると、台所に向かった。

その道中良い匂いが鼻に入ってくる。はて、誰が料理を作っている

のだろうか。主の紫様はまだ寝ているだろうし、縁様は怪我がまだ治っていないはず。

紫様が誰か呼んだのだろうか、と考えながら誰が料理を作っているのか確認するためにそつと扉を開けて台所を覗く。

そこにいたのは怪我をしている筈の縁だった。大丈夫なのか、という言葉を発しようとしたその前に、藍は縁の料理の手際の良さに目を見張った。

同時進行、というものだろうか。鍋でお味噌汁を作っている間にかまどでご飯と焼き魚を作る。だが、そのどれも疎かにはしないで、完璧に各々の調節をしている。

かまどの火の調節をこまめにしつつ、魚の焼き具合を確かめる。味噌汁は沸騰させない温度を保ちながらクルクルと味噌を溶く。

完璧。藍の目にはそつとしか見えなかった。

そんな縁を尊敬したような、羨ましそうな目で見てみると、その彼がふとこちらを見て藍を見つけた。

ビクツと思わず体が反応してしまった。そんな藍の反応を気にする

わけでもなく、縁はできる限り優しい声色で藍に尋ねた。

「おはよう藍ちゃん。いきなりなんだけど、食器がどこにあるか分からない？」

「は、はい。それでしたら、こちらに……。」

「悪いけど3人分の食器をこっちに持ってきてくれないかな。今少し手が離せないんだ。」

「分かりました……。」

カチャカチャと音を鳴らしながら食器を縁のそばに持っていくと、縁はその食器に出来た朝食を盛り付ける。どれもこれも美味しそうな匂いを漂わせながらどんどん食器に盛り付けられていく。

「出来た。じゃあいつもご飯を食べるところに運ぼうか。」

「こちらです。」

おぼんに料理を乗せて縁を居間に誘導する。

居間に着くと手際よく食器を並べる。最後の食器を並べ終わると、縁はふう、と息を吐いた。

「あの……お怪我の方は大丈夫ですか？」

「ん、ああ。少し痛むけどね。歩けない程じゃない。何時までも迷惑かける訳にもいかないし、何より早く料理が作りたかったんだ。」

「料理を……？」

「うん、酒屋って言うても唯酒を出すだけじゃないからね。おつまみとか、料理とかも出すときもあるんだ。もう何百年も続けてるし、何日も料理を作ってたから腕が鈍ってないかどうか心配だったんだけど……まあ、これぐらいの出来なら上々って所かな。」

そういつて並べられた料理を見やる縁。美味しそうな匂いを放つそれらはまだ藍では届かない領域。そして彼はまだまだ腕が鈍っているというではないか。

羨ましい。

そんな感情が芽生えてくる。私が持っていないものをこの人は持つ

ている。私が欲しているものをこの人は持っている。

そんな感情を持って余した藍は、ある言葉をつい口にした。

「あの……私に料理を教えてもらえないでしょうか？」

その言葉を聞いた縁は思わず動きを止めた。縁のその反応に藍は嫌悪感を抱かせてしまったのかと勘違いしてワタワタしたが、取りあえず縁は藍を落ち着かせる。

「でもどうしたんだ急に。俺に料理を教えて貰いたいなんて。」

「……私、立派な式になるためにいろんなことを学びたいんです。」

料理もその一環で、紫様に基本的なことは教えてもらっただんですが、平凡な味にしかならず……。」「

「自分も美味しく作りたい、と。」

コクリと頷くのを見て縁はふむ、と顎に手を当てる。

恐らく自分が料理しているところを見てそう感じたのだろう。何百年も料理を続けてれば手際や料理は上達するだろう。だが、それは経験から来るものであり、別に縁自身が教えられるレベルにいる訳ではないと縁自身が思っているのだ。

そんな自分が、彼女に教えることが出来るのか。

そんな不安を抱えて考えていると、不意に彼女と目が合う。藍の目は揺るがず、こちらを見続けている。瞳に不安や恐怖は無い。

そんな彼女の瞳にあてられたのか、縁は一息吐くと、藍に向き直った。

「……俺の腕じゃメチャクチャ美味いつて程にはなれないと思う。それに俺が教えられるのは怪我が治るまでだ。でも、それでも俺に料理を教えてもらいたいのか?」

「……はい！」

「……分かった。出来る限りの事は俺もしよう。だけど、重要なのは藍ちゃん、君がどれだけ努力できるかだ。」

「がんばります！」

グツと拳を握って宣言する藍を微笑ましく思いながら、まず何から教えてあげようかと考えていると、不意に自分が少し楽しみにしているのに気づいた。

「（何だかんだ言って、俺も楽しみにしてたっていうことか……。）

フツと軽く笑うと、縁は懐から巻きタバコを取り出して火をつけた。肺の中に煙を溜めて一気に吐き出す。紫煙がゆらゆらと天井に昇っていくのを眺めた。

「ところで紫は何時起きるんだ？」

「えっと……実は良く分からないんです。起床時間に多少のバラつきがあつて……。後もう半刻は起きてこないと思います……。」

「……えー……。」

「酷いときは一日起きてこない時も……。」

「……」「飯、食べちゃおうか……。」

「はー……。」

十八杯目・食事

ムクリ、と自分の体を起こす。

そのまま大きく伸びをして体を解す。寝巻きが少し肌蹴て自身の妖艶な体が露になっっているのも気にせず、目を擦りながら居間に向かう。

居間に入れば何時も通り自分の式である藍が朝食を準備してくれているであろう。現に、朝食の良い香りがここまで伝わってきている。

今日のご飯はなんだろう、と少し期待しながら居間への障子を開けた。

「らん、今日のご飯はなに？」

少し間延びした調子でそう藍に尋ねる。と、目に入ってきたのは味噌汁や白米といった質素でありながらも美味しそうな朝食と、わたし少し顔を紅くしながらこちらに駆け寄ってくる藍の姿だった。

どうしてそんなに慌てているのだろうか？

起きたばかりの鈍い頭で思案している最中に、新たに目に入り込んだ人物。最近になってようやく歩きまわれる程度まで回復したその人物。

自分が治療の為に招きいれた彼
酒代縁は知らぬ顔して味噌汁を啜っている。心なしか顔をこちらとは反対側に向けている気がする。

と、慌てている藍が自分に手を伸ばしてきた。何をするのだろうかと思えば、何だ、自分の寝巻きを調べているだけじゃないか。それぐらい自分で直せるし、いつもだったら口で注意するだけじゃないか。

と、ふと気づく。ここにいるのは自分と藍だけではないことを。

顔を向こう側に傾けて味噌汁を啜り、おかずと白米を口に入れる彼の事を。

そして、肌蹴て露になっている自分の体を。

そこまで考えがたどり着いたなら後は早い。自分の顔に血が集まるのを感じながら、急いで自分で寝巻きを整える。

スキマ妖怪であり、九尾の式神である藍の主の八雲紫の朝はこうし

て慌しく始まった。

まだ入ってきたことを引きずっているのか、紫は顔を紅くしながらご飯を粛々と食べている。大人の体は気のせいだが、いつもより小さく見える。

と、そうしながらもようやく食べ終わったので、手を合わせて「ごちそうさま」と言う。藍も紫も食べ終わったので挨拶をしたが、紫の声は若干小さい。

「藍ちゃん、食器運ぶの手伝ってくれない？」

「は、はい。分かりました。」

藍が横目でチラチラみている自分の主は綺麗になった机に突っ伏している。

そんなことも気にせず、縁はサッサと行ってしまふ。藍は少しの間悩んだが、食器をもって縁の後を追った。

「ああ、そこに置いといて。俺がやっちゃうよ。」

言われたとおりの場所に置くと、縁は井戸の水を汲み上げて食器を洗い始める。食器を洗いながら縁は藍に尋ねる。

「ねえ、紫っていつもあんな感じなの？」

「え、あ、はあ。紫様は朝が苦手なようで、いつもあのような格好になってしまふんです。」

「朝が苦手、ね。大妖怪様らしくな弱点だなあ。」

そう言うとクスクス笑う縁。

「昔とあまり変わってない気がするよ、あの子は。大人ぶって、でもまだ俺からしてみれば子供だ。」

「昔の紫様をご存知で？」

「一回会っただけだけどね。あの時もやっぱり大人ぶってたよ。身の丈に合わない格好して、言葉遣いをしてね。」

懐かしむように洗う手を止めて、快晴の空を見上げる。

「俺の店で出すお酒は妖怪じゃ100歳未満はお断りしてるんだ。だけどそれを知らずに紫は来てね、お酒を頼んだんだけど、断って理由を説明したらさっき見たいに顔を紅くしてムクれてたよ。」

「紫様にそんなことが……。」

クスクス思い出し笑いをしながら洗い物の手を再開する。洗い終わった食器を藍に渡しながら話を続ける。

「お酒の代わりに蜂蜜とレモンの汁を合わせた『蜂蜜レモン』っていうのを出してあげてさ。それで我慢してもらって、100歳になつたらお酒を出してあげようって言う約束をしたのさ。」

「それで紫様があんなに楽しみにしていたんですね。」

「楽しみにしてたのかどうかは知らないけど、約束は守らなきゃね。」

うつし終わった、と呟くと、縁は藍に声をかけて食器を戻しに行く。藍はその縁の背中を追いながら、自分の主の昔の話を聞いたことに気分を良くしながら縁に付いていった。

「え〜に〜しい〜……。」

「はっはっは、たかがあられもない姿を見られただけじゃないか。気にするほどの事でもないだろう。なあ、大妖怪殿？」

食器も片付けて自分の部屋に戻った縁は、町で買った本を取り出して読んでいたその最中に後ろから抱きつかれた。

振り向いて確認するまでもない。紫だ。成熟した体を自分の体に擦り付けている。こんな昼間から誘っているのだろうか。

だが、あいにくと縁はその誘いに乗るつもりは無かった。

先程の紫の寝起きの乱れた姿を一目見たときも、感じた感情は『はしたない』というものだったのだ。寝起きとはいえ、美しい美女の乱れた姿をみたなら、殆どの男は欲情するだろう。

だが悲しいかな、縁は既に1000年ほど生きた妖怪。その姿を美しいとは思いこそ、欲情はしない。早い話が既に『枯れている』のだ。主に性的な意味で。

最初のころは旅を続けている最中にどうしても性欲が溜まり、一人で発散していたりもしたのだが、それも年月を重ねることに回数が少なくなり、今となっては一年に一回発散するのが珍しいぐらいだ。爺かお前は。いや、年に関しては爺なのだ。

という訳もあって、紫の抱きつき攻撃もなんら精神的にも身体的に

も問題を出すことも無く軽く受け流すことに成功した。

「あれ？こうすれば男の人を籠絡できるって本に書いてあったのだけれども……。」

「残念、爺の俺にはもう性欲なんて無いに等しいものだよ。」

目論みが外れて少し不満げな紫は早々にその作戦を諦め、今度は純粹に肩越しに乗り出す。

「ね、何の本を読んでるの？」

「仏教の本さ、別に仏様を信じてるわけじゃないけど、こういう本は見てて面白いものだよ。」

「……………発想がもう年寄りね。」

「精神がもう老成しきってるのかな。まあ、こういうのも悪くは無い、もう爺だからね。」

紫の年寄り発言に気を悪くするわけでもなく、縁はクスリ、と笑うと置いてあったお茶を飲み干す。

「ああ、茶が美味い。」

そう呟いた縁の横で、紫が呆れたような溜息を吐いた音が聞こえたのだが、縁は聞こえない振りをして、また空の湯飲みを急須でお茶を注いだ。

「さて、何を作ろうか。」

そう呟いたのは縁以外誰も居ない台所。外を見てみれば既に日は沈んでしまつて、月明かりだけが周りを淡く照らしていた。

クルクルと危なげに包丁を手の内で弄びながら、考える。

ここに来る前に一応好みは聞いておいたのだが、余りに料理のレパートリーが多い縁は何を作ったら一番喜んでくれるのかがイマイチ分からない。

むーんと少々唸りつつ、ようやく作る料理を決めた縁は早速調理に取り掛かった。

魚を捌き、野菜を切り、肉を焼く。その動きによどみは無く、滑らかに料理の過程を終わらせていく。

本当は今夜から藍に料理を教えることになっているのだが、縁はそれを申し訳なさそうに断った。それは今回の主役である紫もそうだが、藍にも縁の料理をおいしく味わってもらいたいからだ。

料理を作る者と料理を食べる者。違いは作ることと食べることではない。食べることに嬉しさを感ずるか食べてもらうことに嬉しさを感ずるか。縁は思っている。

その両方を知ってこそ、素晴らしい料理を作り出すことができるのだ。だから今回藍には食べてもらう側に回ってもらった。

紫と藍。二人の期待を背負っている縁は、少々張り切っているよう

で。陽気に聞きかじった歌を鼻歌で歌い、料理の最中でありながら
楽しそうに料理器具を弄ぶ。

縁は楽しんでいたのだ。久しぶりに本格的な料理ができることに。
また料理を食べてくれた者の笑顔が見れることに。

どんな顔をして出した料理を見てくれるだろう？どんな表情で料理
を口に運んでくれるだろう？どんな感情で料理を味わってくれるだ
ろう？そして、どんな気持ちで料理を食べてくれるのだろうか？

一人そんなことに心を躍らせながら、縁は笑いながら手を動かして
いった。

「さあ、出来たぞー。」

『おお……。』

思わず感嘆の声が紫と藍から漏れる。縁が運んできた料理はそれほどまで美味しそうであり、豪華であった。

藍が率先して料理を並べる中、縁は開いた空間の中を覗き込み、何本かの酒瓶を取り出した。

「あら、面白い能力ね。空間系の能力かしら？」

「空間を創り出す、っていう能力さ。用途はかなり縛られちゃうけど。」

「そうなの？私も空間系の能力を持つてるけど、便利よ。」

「入り口出口が固定だからね、移動することなんて出来ないんだよ。」

「それはまた……。面白い能力ねえ……。」

驚いているような、呆れているような表情の紫。縁はそれを気にしたような様子も無く、杯を用意しながら、

「そういえば藍ちゃん、今何歳？」

「え？えっと……69歳ぐらいだと……。」

「うーん、じゃあお酒はまだだね。」

「ふふふ、藍もまだまだ子供だからねえ。お酒は大人の楽しみよ。」

237

「でも紫様、たしか紫様が始めて縁様に会った時、縁様にお酒を断られたんですね？歳が100歳にいつてないという理由で。」

「ちよ、縁、何で藍にその話してるのよ!？」

「え、話しちゃ不味かった？」

「私の面目というか藍の主としての威厳が……。」

「紫様の新たな一面が見えました。」

「ちょっと何か藍の目が嘲笑の色に染まってるんだけど!？」

「そんなことはないよね、藍ちゃん？」

「はい、まさか主である紫様に対してそんなことはできませんから。」

「嘘だッ！」

「はいはい、大声出さないで早く食べようね。」

「ぐぐぐぐぐぐぐ……………」

そんなことがありつつ、縁の作った料理は全て3人の胃の中に納まった。

「いい？おいしい料理を作るには、食べる側と作る側、両方の気持ちを理解して、初めて作ることが出来るんだ。それをしっかりと憶えておいてね。」

「はい！分かりました！」

食後、縁がそう藍に諭すと、藍は真剣な表情でそう頷いた。その概に微笑みながら縁は藍の頭を撫でてやった。目を細めながら気持ちよさげに堪能する藍に、紫はどこか不満げで。

「ねえ縁いゝ藍ばっかりずるいわよ。私も縁の事助けたんだから、御褒美か何か欲しいんだけども。」

「はいお酒。」

トンと置かれたのは年代物のお酒。見るからに年代物だ。だって埃かぶってるし。

「うわ〜ん！縁のバーカバーカ！」

ちやっかり出したお酒を手にしながら、紫は部屋から飛び出していた。その後姿にクッククックと喉の奥で笑う縁。

「昼言つたとおりだろう？まだまだアイツは子供だつてさ。」

「それでも、私の自慢の主です。」

そうかい、と言って縁は喉の奥で笑いながら、杯の酒を飲み干した。

既に月が夜の空に昇りきった頃。縁は一人屋根の上で杯を傾けていた。

ぼおつと杯を傾けては継ぎ足すという行為を繰り返していると、不意に縁のすぐ横から奇妙な音と共に、紫がスキマを開いて出てきた。

「一緒に一緒に？」

「自由に。」

ペタリと優雅に縁の横に座ると、杯を取り出して先程縁から貰った埃かぶった酒瓶を取り出した。

「それな、俺が最初のほうに作った酒なんだ。」

「あら、だつたらかなりの値打ち物ね。……売らないからそんな目で見ないで頂戴。」

そりゃそうかい、と呟くと、縁は視線を月に移した。

と、スッと目の前に出された杯。

「乾杯、しましょ。」

コツンと杯を合わせて二人で酒を煽る。そんなことを何回か繰り返した後、紫が口を開いた。

「藍から料理の事聞いた？」

「ああ聞いた。素直な娘だ。こんなにお前の事を考えてくれてるんだから、大切にな。」

「もちろん。目に入れても痛くない式よ。だからこそ貴方に預けたいの。」

「……………はあ？」

思わず顔を紫のほうに向けてしまう。紫はその縁の表情が面白いのか、クスクス笑っていた。

「貴方に預ければ料理の事を教えてもらって、なおかつ世界のさまざまなことを知ることが出来るじゃない？あの娘にはまだまだ知らないことがたくさんある、だからこそ貴方について行かせれば世界を知ることが出来る。」

「それってさ、お前がやれないのか？」

「面倒くさいっていうのが本音。」

キリツとこちらを向く紫についチョップを繰り出してしまふ縁。中々効いたのか、頭を抑える紫がさらに続ける。

「でも藍も貴方に付いて行くことに賛成してるし、懐いているじゃない。それに、またあんなことになるのは私、イヤよ？」

「……………」

思わず言葉に詰まる。多分、あの事というのは清明と対峙した時の事だ。スタボロにされ、命を失う一歩手前まで追い込まれた。

「ああみえて藍は大妖怪の子供。縁、貴方よりはよっぽど戦える。貴方を守ることができる。だから……………お願い。」

「……………何故自分自身で俺についていこうとしない。」

「私の夢のためよ。」

「夢？」

「そう、人と妖が共存していける世界、場所。その実現の為に動かなければならないの。」

チラッと紫のほうをしてみると、紫は縁が見たことのないくらい決意の表情で月を見ていた。その表情を見た縁は、

「……まあ、丁度店の手伝いが欲しいと思ってたしなあ。誰か一人付いてきてくれる、のは有難いなあ。」

「じゃあ……！」

紫の表情が明るくなったのを見届けて、縁は少し強めの酒を飲み干した。

願わくば、彼女の夢が叶いますようにと月に願った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4651o/>

東方酒乱伝

2011年10月10日18時36分発行